

## 「骨のうたう」の原型

### いまひとつの読みの試み

福 田 静 夫

—

竹内浩三の名前が、「戦死やあわれ 兵隊の死ぬるやあわれ」と始まる詩「骨のうたう」によってようやく広く知られるようになったのは、1980 年代に入ってからのことであった。竹内は、はじめは、出身地の伊勢周辺の旧制宇治山田中学同窓生の範囲で追憶されていたにすぎなかったが、桑島玄二『純白の花負いて』（理論社、78 年、以下『純白の花』と略称）や足立巻一『戦死ヤアワレ』（新潮社、1982）のなかで、著者たちそれぞれの戦争体験に重ねて、竹内の詩「骨のうたう」を見いだした感動が紹介されていく。まもなく小林察編『竹内浩三全集』で、「骨のうたう」1・「筑波日記」2（新評論、1984、以下旧全集と略称）の二冊が出版されて、太平洋戦争末期の抑圧的な軍隊の中にあってもけっして失われることのなかった竹内の伸びやかな心の世界を開いてくれることになった。翌年には、同じ編者によって竹内の評伝『恋人の眼やひょんと消ゆるや 戦没の天才詩人竹内浩三』（新評論、1985、以下『恋人の眼や』と略称）が書かれた。体質的に戦争を嫌悪しきっていた竹内であったが、日本帝国の断末魔の絶望のあがきともいうべき「レイテ決戦」後の「ルソン作戦」に動員されて、斬り込み隊員としてその悲劇的な運命に倒れたのは 23 歳の 1945（昭和二十）年 4 月、すでにそれから 40 年近くが経っていた。

それからさらに 20 年近く経った 2001 年、竹内の夭折を惜しむ人々の努力によって、新たに発見された「日本が見えない」などの詩のほかに、中学時代、大学時代の未刊の資料や写真・マンガなど、これまでに竹内の知られている限りの作品を収めた『日本が見えない』（藤原書店、以下新全集と略称）が編集・出版された。この新全集は、これまで竹内の代表作と考えられてきた「骨のうたう」の奥行きをもっと深め、一人の青年詩人がすでに今日の日本の本質を問い直す鋭い直観の持ち主であったことをあらためて確認させることになった。

この小論は、新全集の刊行を機に、かねてから「骨のうたう」にかかわって私が抱いてきた疑問を解き明かそうとする一つの試みである。それは、新全集の編者自身が次のように書いている問題に関わっている。

代表作「骨のうたう」の成立については問題がある。一九五六年、私家版『愚の旗』（中井利亮編）に載って以来、この一編の詩が多くの著名人やマスメディアによって紹介され、竹内浩三の名を広めてきた。しかし、この詩にはもう一つの異稿があって、竹内自身が推敲して作成したのか、それとも編者中井が補作したのかという議論が生じた。僕の見解は後者である。中井氏は、親友への共感と思いやりから、原型を見事にアレンジして、竹内を再生させたと考える。そして今後もこの型が生き続け歌い続けられるだろう<sup>1)</sup>。

ここで編者は「骨のうたう」の「原型」と「完成稿」との関係如何という疑問をだしているのであるが、私のかねての疑問というのはこの「原型」のなかのある語句にかかわってのもので、それがまた編者の疑問にも関連しているのである。

## 二

具体的な論議に入る前に、新全集に掲載されている年譜を手掛かりに、行論に必要ないくらかのことを補いながら、まずは竹内の簡単な経歴を記しておくことにしよう。

竹内浩三は、1921（大正十）年5月12日、三重県宇治山田市（現伊勢市）に生まれた。生家は、地域でも指折りの商家で、四歳上には姉のこう（弘）があった。父親は、天文学の趣味があり、漢学の素養も積んだ人であったが、やや旧弊な家督相続の考えに立って跡継ぎ息子の教育に臨んだが、必ずしも過剰に抑圧的であったわけではなかった。母は佐々木信綱門下で短歌をよくし、また竹内を連れて新興期のいろいろの映画を見るのを楽しんだ人であって、それがいつしか竹内の心に文学と映画好きの種をまくことになった。だが竹内は、33（昭和八）年、小学校の五年生末、12歳を少し前にしてその母と死別する。39（昭和十四）年、県立宇治山田中学（旧制）を卒業し、上京して浪人中に、また父を失う不幸に遭ったが、父は子の自由な行く末のために必要な程度の資産は残してくれていた。

竹内が中学校卒業後に浪人生活をしたのには、竹内なりの理由があった。中学校在学中は、級友を誘ってマンガ入りの回覧雑誌を作成することに力を入れていたので、抜群の才能をみせていた幾何学を除けば、学業成績は上首尾とはいかなかった上に、雑誌のなかに時局を諷刺した文章やマンガを載せて筆禍事件を起こして父親が学校に呼び出され、柔道教師の家で中学校最後の一年間は身柄預かりになっている<sup>2)</sup>。なによりもまた軍人嫌いであった竹内は、必修の科目とされていた軍事教練の成績が芳しくなかった。しかしそうした外面的な理由の他に、本来は、映画監督の仕事に就きたいという希望が竹内にあって、それが父親や親族の容れるところではなかった。竹内の内面には葛藤があった。それはまた竹内の学業にたいする不完全燃焼や、謹慎中も飲酒・映画鑑賞などによって校規に反抗し続ける「不良」ぶりにもつながっていた。竹内は、当面、東京の第一外国語学校で浪人生活を送るという迂回作戦をとることになったのだが、父の死という不幸は、竹内を家の束縛から解放放つことになった。

翌 1940（昭和十五）年 4 月、竹内はかねて念願の日本大学専門部（現芸術学部）映画科へ入学し、始めて充実した学生生活をおくることになる。母代わりとして竹内の大学生活を支えたのは、松坂の松島家に嫁していた姉こうであった。

竹内の映画科志望には、母の影響による映画好きの傾向をさらに刺激するいくつかの条件があった。何よりも竹内が物心ついていく昭和の初期は、日本映画では、松竹を先頭にしてトーキーの時代が定着し、アメリカ、フランスからの輸入映画の増加とともに、映画の大衆化と芸術化とが錯綜して発展していく時期に重なっていた<sup>3)</sup>。映画は着実に日本文化のなかに重要な一角を占めはじめていたから、竹内が中学校の禁則を犯してまで映画をよく見たのは、また一つの時代の必然でもあった<sup>4)</sup>。なお宇治山田中学校の先輩には、映画監督の小津安二郎（1903-63）がおり、竹内が中学校に入学した当時には、すでにいくつもの傑作を残す大家になっていたことも考慮されてしかるべきであろう<sup>5)</sup>。竹内が日大の専門部に入った 1940 年代になると、映画のもつ大衆的な影響力に着目した政府の「映画国策化」の方針にそって、「肉弾三勇士」のような戦意昂揚映画・時局映画や、文部省製作の教育・文化映画などが重視されるようになり、やがて小津も軍部からの要請を受けてシンガポールに派遣されるなど、映画にも軍事色が強まっていくけれども、太平洋戦争の初期には、日本大学の映画科には、なお映画のもつ文化的・芸術的創造性に夢を燃やす多くの知識人・映画人・若者たちが集まってきた。たとえば非常勤講師ではあったが、「文学理論」林達夫・滝口修三、「創作指導」伊藤整、「写真概論」金丸重嶺、「大衆文学研究」大佛次郎といったそうそうたるメンバーが教員に名を連ねていたし、竹内の前後の入学生には、三木のり平、小林桂樹、沼田曜一、西村晃、高英男、キノトールなど、戦後にその可能性の花を開かせた多くの逸材がいた<sup>6)</sup>。そして竹内自身も、「平均一日二カイ」は映画を見ると姉への手紙に書いているように、文字通りに映画漬けの日々を送っていた<sup>7)</sup>。

だが 1941（昭和十六）年 10 月、「大学学部等ノ在学年限ノ臨時短縮」に関する勅令で、12 月末に卒業が繰り上げられ、卒業と同時に徴兵検査が実施されることになった。その措置を追うようにして 12 月には「太平洋戦争」が始まり、竹内も翌 42 年 10 月、第二回の半年の繰り上げ卒業によって徴兵され、三重県久居町の中部第三十八部隊に入営する。この年、1 月から中学校の同級生たちと『伊勢文学』を創刊し、11 月までに五号を出している。それは、竹内にとっては、映画監督への道を軍務のために断たれようとするに對するある種の抵抗、ないしは代償行為でもあった<sup>8)</sup>。

1943（昭和十八）年 9 月、竹内は茨城県の西筑波飛行場に新たに編成された滑空部隊に転属になり、「挺身隊」に編成される。44（昭和十九）年には、年初から兵営中で「筑波日記」を書き始め、その二冊目が三月目の記録を終わろうとする 7 月 29 日で余白を残して中断する。以後竹内の書き残したものは、営外から検閲を受けずに姉に宛てた封書一通と、級友の満州での「戦死」を悼んだ葉書など五通だけとなる。12 月、フィリピンでの斬り込み部隊として戦地に送られる。そして三重県庁の公報によれば、1945（昭和二十）年 4 月 9 日、フィリピンのルソン島のバギオ高地で戦死した。

おそらく竹内は、戦場にも『日記』を携行し、そこで遭遇するさまざまな事件を独特の感性で記録し続けていたに違いない。あるいは、徹底的に追い込まれたルソン島の戦況ヲ考えると、そのような想像の余地はまったくなかったのかも知れない。いずれにしても、戦前からアメリカによってリゾート地として開発が進められたバギオ高原のどこかに、いまは竹内の存在も、ありえたかもしれないその魂の記録も、永遠に失われたままである。

### 三

新全集のはじめには、竹内の残した詩篇がまとめられている。その冒頭には新しく発見された「日本が見えない」がおかれ、それがそのまま全集のタイトルにもなった。

日本が見えない

この空気

この音

オレは日本に帰ってきた

帰ってきた

オレの日本に帰ってきた

でも

オレには日本が見えない

空気がサクレツしていた

軍靴がテントウしていた

その時

オレの目の前で大地がわれた

まっ黒なオレの眼漿が空間に

とびちった

オレは元素（エーテル）を失って

テントウした

日本よ

オレの国よ

オレにはお前が見えない

一体オレは本当に日本に帰ってきているのか

なんにもみえない

オレの日本はなくなった  
オレの日本がみえない<sup>9)</sup>

編者によれば、この詩は、もう一編の「よく生きてきたと思う」とともに、日大映画科在学中に竹内が教科書として使用した『パウル・ハイゼ傑作選』というドイツ語読本の余白に書かれていたもので、執筆は、「骨のうたう」——「骨」は「こつ」と読む——と同時期、つまり竹内が三重で入隊し、筑波で訓練を受けている1942（昭和十七）年10月以降44（昭和十九）年前半の時期と推定されている。編者が続けて「骨のうたう」と「よく生きてきたと思う」とを載せているが、たしかに緊密に結びついたこの一連の詩は、豊かなべき未来を非情にもはやばやと打ち砕かれ、歴史の暗部に投げ込まれる運命の前に立たされたひとりの青年のやるせない苦悩をよく表現するものとなった。

戦場に斃れた「オレ」が日本に帰っても「日本が見えない」のは、眼部を直撃されたためなのだろうか？ また竹内にとっては、どうして死は「眼漿」の飛散するイメージなのだろうか？ それが映画を仕事とするものにとって最も決定的な器官であるからか？ いや、そもそも竹内にとっては、戦争にゆくこと、兵士になることに意味があったとするなら、それは自分で戦争を見て、描くためであり、視ることが創造することにつながるなら「死ぬことすらさえ、いといはせぬ<sup>10)</sup>」と書いていたことからすると、戦争によって映画人の「眼」という本質的な器官が破壊されることは、たんなる生理的な死がもたらされるということ以上に、映画作家そのものが死に突き落とされることを意味しているのではないか？ さらには、「オレ」に「日本が見えない」のは、視る能力の欠落のためというのではなく、「オレ」にとってはかつてあった、もしくはあるべきものと考えられていた「日本」が変質し、存在を止めたためではなかろうか？

「日本が見えない」は、こうしたいくつもの問いかけの前に読者をおく詩である。

「骨のうたう」では竹内は、自分にとっての戦死を、多感なみずからの人生とそれを満たすべき愛からの絶望的な疎外と忘却のなかでのにおいて、痛切な哀惜をこめてうたいあげている。このうたい方には、戦争を通してなおも生き残る日本が、彼の死の無念さに対して、まずはまちがいなく、かぎりもなく忘恩的であるだろうことに対する告発がある。というよりも、その「骨」のかすかな呟きに託した彼特有のユーモアに包み込んだ語りには、みずからにみずからの死を繰り返し納得させようとするやり場のない憂悶がある。

## 骨のうたう

戦死やあわれ  
兵隊の死ぬるや あわれ  
とおい他国で ひょんと死ぬるや  
だまって だれもいないところで

ひょんと死ぬるや  
ふるさとの風や  
こいびとの眼や  
ひょんと消ゆるや  
国のため  
大君のため  
死んでしまうや  
その心や

白い箱にて 故国をながめる  
音もなく なんにもなく  
帰っては きましたけれど  
故国の人によそよそしさや  
自分の事務や女のみだしなみが大切に  
骨は骨 骨を愛する人もなし  
骨は骨として 勲章をもらい  
高く崇められ ほまれは高し  
なれど 骨はききたかった  
絶大な愛情のひびきをききたかった  
がらがらどんどんと事務と常識が流れ  
故国は発展にいそがしかった  
女は 化粧にいそがしかった

ああ 戦死やあわれ  
兵隊の死ぬるや あわれ  
こらえきれないさびしさや  
国のため  
大君のため  
死んでしまうや  
その心や<sup>1)</sup>

新全集に入ったもう一つの詩「よく生きてきたと思う」は、なお未定型な、人生の模索にさす  
らう竹内のいわば等身大の自画像である。最後の4行の詩句には、明らかに宮沢賢治の「雨にも  
負けず」の痕跡が残っている。この詩に来て、「骨」になる「兵隊」とは、実はこのようなあえ  
かな、生きてなお試みることの多かるべき、そしてなによりもたっぴりと生きるためにデラック

すな時間を藉すべき人間的な可能性のことであつたことがはっきりする。徴兵されることは、そのままに「生きること」を「死ぬこと」に直結させる論理に身を委ねることであり、そのようにまた強制する装置が音を立てて展開しはじめたのが決戦段階であるが、そこに身を置かなければならない非条理に苦しみぬきながら、竹内はけっして自分を殉国の鬼神に仕立て上げようとはしていない。むしろ偽悪的なまでにみずからの実像を、あるがまま赤裸々にここに刻みつけようとしている。ここには、どのような破廉恥漢でも、悪業を積み重ねた人非人でも、ひとたび「皇軍」の兵士として「戦死」しさえすれば、そしてその「戦死」がたとえ侵略戦争を遂行するための「戦死」であつたとしても、すべて「護国」の神になるという、当時の支配的な「皇軍」の思想に対する人間的な不同意の表明がある<sup>12)</sup>。あの戦争とは、このような人間的な可能性の仮借なき否定と剥奪の上ではじめて可能となる戦争であつた。そのことを、これほどはっきりと、真率かつ平明に、歌った詩を私は知らない。あの時代には、青春がここに描かれたような自画像をもつことは許されていなかった。「戦死」という罰に処せられていることを知っていた圧倒的多数の若者たちは、あえて自分の青春の可能性に「皇軍兵士」という狭窄衣を着せ、「立派」な「日本人」として「戦死」する途に就かなければならなかった。けれども、竹内の「よく生きてきたと思う」に描かれているいまひとつの青春の自画像に、自分を重ね合わせることのできる若者は、いまにしてはじめて多くを占めるようになっていたのではないだろうか？ やや長いけれども、ここではぜひとも全編を引用しておかなければならない。

よく生きてきたと思う

よく生きてきたと思う

よく生かしてくれたと思う

ボクのような人間を

よく生かしてくれたと思う

きびしい世の中で

あまえさしてくれない世の中で

よわむしのボクが

とにかく生きてきた

とほうもなくさびしくなり

とほうもなくかなしくなり

自分がいやになり

なにかにあまえたい

ボクという人間は  
大きなケツカンをもっている  
かくすことのできない  
人間としてのケツカン

その大きな弱点をつかまえて  
ボクをいじめるな  
ボクだって その弱点は  
よく知ってるんだ

とほうもなくおろかな行いをする  
とほうもなくハレンチなこともする  
このボクの神経が  
そんな風にする

みんながみんなで  
めに見えない針で  
いじめ合っている  
世の中だ

おかしいことには  
それぞれ自分をえらいと思っている  
ボクが今まで会ったやつは  
ことごとく自分の中にアグラかいている

そしておだやかな顔をして  
人をいじめる  
これが人間だ  
でも ボクは人間がきらいにはなれない

もっとみんな自分自身をいじめてはどうだ  
よくかんがえてみる  
お前たちの生活  
なんにも考えていないような生活だ



もっと自分を考えるんだ  
もっと弱点を知るんだ

ボクはバケモノだと人が言う  
人間としてなっていないと言う  
ひどいことを言いやがる  
でも 本当らしい

どうしよう  
ひるねでもして  
タバコをすって  
たわいもなく  
詩をかいていて

アホじゃキチガイじゃと言われ  
一向くにもせず  
詩をかいていようか  
それでいいではないか<sup>13)</sup>

#### 四

ところで、こうした濃密な竹内の詩の個性的な世界が描き出されるようになったところで、最初に問題にしておいたように、「完成稿」とされている「骨のうたう」をめぐる問題を改めて考え直してみる必要が出てくる。「骨のうたう」の「原型」については、新全集とおなじ編者（小林察）によってすでに旧全集1の「改題」にも収録されていて、両者の関係についての詳しい考証が行われている。

編者によると、「骨のうたう」の「完成稿」は、営外に出れた竹内が、検閲の眼をぬすんで、ひそかに中井宛の手紙の中にはさんだものであったという桑島『純白の花』の見解を伝えている。桑島の見解は、中井利亮の記憶によったものだという。と同時にまた編者は、竹内たちの同人誌『伊勢文学』第八号（竹内浩三特輯号、1947年8月頃）に「原型」が掲載されていること、竹内にはできた作品を推敲して改稿するということはかつてなかったこと、すでにその頃は当の中井自身が航空隊に入っていて、そのように危険な手紙を受け取る条件がなかったこと、「完成稿」の初出は中井利亮編『愚の旗』（私家版、1956）であるが、戦後に出た『伊勢文学』第八号（竹内浩三特集号、1947年8月推定）には「原型」が掲載され、末尾には「一九四二・八・三」と竹内の入営直前の日付が記されていること、後に中井本人から「多少手入れをした」という証言

をえていることなど、「完成稿」が竹内自身の手になったものとするには、かなり重要な疑義があることを明らかにしている<sup>14)</sup>。そのときから 13 年経過したのだが、問題のカギをにぎる中井の確たる証言はないし、「完成稿」の原稿も出てこなかった。その結果編者は、新全集の解説で、「完成稿」が中井の「級友への共感と思いやり」による「補作」だろうと推測し、「補作」が「原型」を見事にアレンジし、再生させたと評価したのであった。

かつては私も、編者のその評価をそのまま受け容れてきていたが、それは私の側に、旧全集で「原型」を知ったときに感じたちょっとした疑問があったからである。紹介されている「原型」には、意味不明の語句がある。それは、ミスプリント、もしくは竹内の原稿の書き誤り、ないしは原稿の誤読があるのではないか、という疑問である。そして今回新全集には、竹内の生原稿が写真製版されているのを見て、誤字や当て字の誤りをあまり意に介しない竹内の書癖——それはいったん書いた原稿にはあまり推敲を加えないという彼の性癖と一体のものであろう——からしても、そうしたミスプリントや原稿判読の誤りがありうるのではないか、という感じはいつそう強くなった。そしてそのような書癖は、結果として、中井に「原型」を「補作」する必要を思わせることになったのではないか？ 私のかつての疑問は、こうして「原型」と「完成稿」との関係如何というところまで踏み込むことになってしまった。

私のミスプリント説は、おそらく竹内自身の手になる「原型」の原稿が残っていれば、すぐさまその当否を明らかにできるのだが、その原稿はどうも残っていないようだし、残念ながら、編者もこの疑問に答えてくれるような格別のヒントを与えてくれない。そこで、いくつかの想定をしながら、自分なりに自分の疑問に答えを出してみることにする他はないだろうと思いついたわけである。

論議に入る前の前置きがやや長すぎた。何よりもまず「骨のうたう」の「原型」を見ておく必要がある。もっとも「原型」といっても、旧仮名遣いは新仮名遣いに改められているし、原稿ではカタカナ書きであったという意見もあるようだが、ここでは新全集に掲載されたものにしたがうことにする。

#### 骨のうたう（原型）

戦死やあわれ  
 兵隊の死ぬるやあわれ  
 とおい他国で ひょんと死ぬるや  
 だまって だれもいないところで  
 ひょんと死ぬるや  
 ふるさとの風や  
 こいびとの眼や  
 ひょんと消ゆるや

国のため  
大君のため  
死んでしまうや  
その心や

苔いじらしや あわれや兵隊の死ぬるや  
こらえきれないさびしさや  
なかず 咆えず ひたすら 銃を持つ  
白い箱にて 故国をながめる  
音もなく なにもない 骨  
帰っては きましたけれど  
故国の人によそよそしさや  
自分の事務や 女のみだしなみが大切に  
骨を愛する人もなし  
骨は骨として 勲章をもらい  
高く崇められ ほまれは高し  
なれど 骨は骨 骨は聞きたかった  
絶大な愛情のひびきを 聞きたかった  
それはなかった  
がらがらどんどん事務と常識が流れていた  
骨は骨として崇められた  
骨は チンチン音を立てて粉になった

ああ 戦場やあわれ  
故国の風は 骨を吹きとばした  
故国は発展にいそがしかった  
女は 化粧にいそがしかった  
なんにもないところで  
骨は なんにもなしになった<sup>15)</sup>

この三聯からなる詩を少し注意深く読んだ人は、きっと私と同じ疑問を抱くに違いない。それは、「原型」の第二聯にある次の三行にかかわっているはずだ。

苔いじらしや あはれ兵隊の死ぬるや  
こらえきれないさびしさや

なかず 咆えず ひたすら 銃を持つ

まずここで、誰でも最初におかれている「苔」という言葉に引っかかるのではないだろうか？「苔」が「いじらしや」というのは、何とも理解しがたい。「あわれ兵隊の死ぬるや」と続いていくためには、「苔」という言葉のイメージは、死んだ兵隊の屍（かばね）とか、兵士を埋葬した墓とかのイメージに続くのが自然だろうが、ここではなお生きている「兵隊」に「苔」のイメージが重ねられている。孤独に、どのような言挙げもすることなく、ひたすら銃をもたされて死に面しているばかりの「兵隊」を、「苔」の「いじらし」として形容するのは、およそなじまないのではないだろうか？ ましてや外地での戦死者の帰還は、竹内が第三聯の四行目からすぐ続けてうたっているように、「骨」になって白木の箱に納められるのである。白木の箱に入ってひと音と音を静めている「骨」に、いったいどのようにして「苔」のイメージが結びつくというのであろうか？

この「苔」については、桑島による解釈がある。「兵士なんていうものは、下等植物の苔のようなもの」で、「故国をとおり離れた他国の地で、黙ってひたすら銃をもっているすがたは、苔が地を這っているようにあわれである<sup>16)</sup>」というのだ。たしかにこの解釈によって、「兵隊」の「苔」のような「あわれ」さは説明できても、「苔」のイメージに「兵隊」の「いじらし」さを重ねることには無理があるのではないだろうか？ しかもその「苔」としての兵隊から白木の箱に入った「骨」への転化をうたうのは、飛躍がありすぎて、竹内の詩に特有な自然さが損なわれてしまうのではないか？

私の当初の疑問は、ここ止まりであった。ところが昨秋、ある必要があって、たまたま中原中也の詩を読み返しているとき、「秋岸清涼居士」に行き当たってはっと気づいたことがあった。当時二五歳の中原が、二〇歳の弟恰三の死を悼んだこの詩の中で、中原は繰り返して「消えていった」弟のいのちを「紫の苔」になぞらえているのである<sup>17)</sup>。幼時に次弟亜郎を失ったのに続いて、また肉親を失った中原の悲しみは深く、それはまた間もなく愛息の文也を失う打撃を決定的なものとする前提をつくった。

もちろんここで「苔」という言葉とイメージが重要なのであって、それが中原の詩中の言葉である必要はかならずしもない。中原の詩のなかで、人として花咲く前に失われるいのちへの愛おしみのために用いられていた「苔」という言葉。そこから私の連想はただちに竹内の「苔」という意味不明の言葉に飛び、実は竹内の意中では、「苔」と書かれているところには、本来は「蒼」という言葉がおかれるべきであったのだ、と思いついたわけである。それを『伊勢文学』の編集に携わった誰かが読み誤ったか、もしくは竹内自身が書き誤ったのではなかったか？「つぼみ」という言葉には「蕾」という漢字を当ることもできるし、それならば「苔」と読み誤られる（あるいはそれとまぎらわしい字形になる）こともなかっただろうが、竹内の詩の草稿では「蒼」という漢字が用いられていたために（あるいは用いるつもりであったために）、それはよく似た「苔」という漢字に読み誤られたのであろう<sup>18)</sup>。そして花の「蒼」とは、中原の場合にはアヤメ

を思わせる紫の花の「荅」であったのだが、竹内の場合には、まずは間違いなく薄紅の桜の「荅」であったであろう。桜の「荅」にたとえられる若い兵隊だからこそ、それが「消える」ことはまことに「いじらしい」という思いに胸ふさがれるのではないだろうか？

「荅」を若桜の「荅」と思うについては、一九四四（昭和一九）年、一二歳の年に軍需工場に学徒動員された私には、忘れることのできない思い出がある。その年、軍需省が選定した戦意昂揚の歌「ああ紅の血は燃ゆる——学徒動員の歌」（野村俊夫作詞・野本京静作曲）の歌い出しが、「花もつぼみの若桜」となっていたことである。そこから、「五尺の生命ひっさげて／国の大事に殉ずるは／我ら学徒の面目ぞ／ああ紅の血は燃ゆる」と、殉国の美を高唱する詩句が続いていく。当時一般に「桜」は、本居宣長の「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」に見るように、「日本」的なものの美的な表現として最も多用されたシンボルであったから、「咲いた桜が男なら／慕う胡蝶は妻じゃもの／意気で咲け桜花／八紘一宇の八重一重」とか、「七つ釦は桜に錨」とか、「九段の桜」とかのフレーズで歌謡にうたわれ、「山桜隊」・「若桜隊」・「葉桜隊」・「初桜隊」・「桜花隊」など、特攻隊名にも頻用された。そのなかでも若桜、それもその「荅」とは、何よりも学生・青年など、なお紅顔の面影を残した兵士たちの雄々しさを象徴する言葉であった。竹内がフィリピンに送られたのは44（昭和十九）年12月のことだから、当時日本の各地で歌われていたこのような歌の数々を竹内が知る機会は十分あった。いずれにしても竹内は、桜イメージが氾濫する世相のなかで「骨のうたう」を作り、「荅」というイメージを意識して自分の詩に読み込んだ可能性もあった。

だが竹内は、益荒男ぶりの文脈に詠み込まれている桜のイメージを「荅いじらしや」というすなおな情感のもとに掬いあげる。そうして竹内は、死の思念に硬直し、死に急ごうとする益荒男ぶりに緊張した桜の「荅」の虚飾を剥ぎとり、そのうちに生身の情感を注ぎ込み、散るのを惜しまれるべき「いのち」を蘇生させるのだ、と言ってもいい。そもそも「荅」には、花咲くべき「いのち」の時こそが待たれるべきはずのものだからだ。自分の「いのち」へのいとおしみの気持ちをもこめた「荅いじらしや」という心やさしい一句は、まぎれもない一人の生きた若者が「銃」をとらされてみずからの孤独な死を受け容れなければならない状況をイメージさせることによって、散る桜に仮託して純粋な心を虚構の大義のための死に陶醉させようとするトリックを一拳にうち砕くものとなる。「荅」という表現には、若者の生へ向かうべき心、人間的現実への覚醒、そういった強い訴求力がこめられているのではないか？

そういえば、竹内には「桜」をうたった、いかにも竹内らしい短い詩があった。

#### 兵営の桜

十月の兵営に  
桜が咲いた  
ちっぽけな樹に

ちっぼけな花だ  
しかも 五つか六つだ  
さむそうにしながら咲いているのだ  
ばか桜だ  
おれは はらがたった<sup>19)</sup>

秋を春と取り違え、選りに選って兵営などに植えられたちっぼけな桜の木に咲くちっぼけな、わずかばかりの花。この桜に竹内はたぶん自分を重ねて見ている。だからそのいじらしさのあまりに「ばか桜」というとき、そこには生きる時と所を誤った己れと桜への憐れみといじらしさとの入りまじった微苦笑だけがあるのである。

## 五

「骨のうたう」の「原型」は、第二聯の冒頭の「苔いじらしや」という言葉に来て、違和感を生むのではないか、ということを上指しした。そしておそらくは「蒼」を「苔」と読み誤られた詩想の混乱のゆえにこそ、また「蒼」と読むときに立ち現れる竹内の詩想の強力な訴求力を見落としたことにこそ、実は、竹内の「原型」の「補作」にいずれかの友人を駆り立てた必然性があったのではないだろうか？ こう考えると、いわゆる「原型」のミスプリント問題と思われた私の疑問は、「原型」と「完成稿」との関係問題へと広がってゆくことになる。

「原型」と「完成稿」とを全体として比較してみると、「補作」の特徴がはっきりしてくる。「原型」の第一聯は、三行目の「とおい他国」が「遠い他国」と漢字書きに一部が改められ、三・五・八行目の「ひょん」という言葉の傍点が消されているなどという小さな違いを別にすれば、「完成稿」にそのまま生かされている。「補作」が目立つのは、まずはミスプリント問題を指摘した第二聯だが、そこだけではない。とくに「補作」は、第三聯に集中している。「原型」と「完成稿」との第三聯を読み比べてみればすぐ分かるように、二つの第三聯には、まったく共通な言葉がない。そしてそのことは、「補作」がその限界を越えて、「骨のうたう」全体の詩想を一変させるまでになっているということでもあるが、その点については、後に立ち返らなければならない。そうした「原型」と「完成稿」との「補作」を通じた違いを意識して、あらためて第一聯に立ち返ってみると、第一聯の読みにもどうも違いが出てくるように思えてならない。

第一聯を最初に読んだときの私は、「兵隊」の「戦死」の「あわれ」さを、「とおい他国」で「ひょん」と、誰知ることもなく死ぬことに関わらせて読んだ。ここで「ひょん」という軽妙な表現が利いていて何とも哀切である。続けて「ふるさとの風」、「こいびとの眼」がまた「ひょん」と消えるとうたわれている。前の場合には、「ひょん」というのは、兵士の死に方を外からみた表現であるのに対して、後の場合には、兵士の心の内面からの思い出の消え方に内側から迫った表現となる。竹内が「原型」で「ひょん」という言葉だけに傍点を付しているのも、そこにこめ

られているこうした情感の振幅に留意してほしいからであったのかも知れない。時には「一銭五厘」とさえいわれるように、召集令状のための切手代に相当するだけの価値しかもたないものとして軽んじられていた兵士のささやかでひっそりとした「戦死」であっても、その一人ひとりの人間としての内側には、限りもなく愛しく、貴重なものがあり、それがまた兵士の体とともに「ひょん」と、情け容赦もなく、この世から抹殺されてしまうのだ。このあまりにも残酷な兵士の「戦死」は、けっして兵士のみずから望んだことではなく、「国」——これはもちろん「お国」と呼ばれた天皇制国家のことだ——と「大君」——これももちろん天皇のことだ——のための戦争によって、戦場に引き出された結果なのだ。

でもひるがえって「荅」という言葉がもっているような、竹内の詩の発想の生きた具体的なイメージへの訴求力のことを考えてみると、第一聯にも竹内の具体的なイメージへのこだわりにしたがって読み直してみるべき新しい可能性があるのではないか、と思えてくる。

たとえば、「戦死」が「あわれ」なのは どうしてなのだろうか？

おそらく「戦死」の歴史的背景の変化がそこにある。「戦死」がまだ比較的少ない場合、そして戦争そのものが赫々たる戦果や勝利にむすびつけられていた場合には、「戦死」とはひたすら「名誉」あるものと宣伝されたし、また広くそのようなものとして世間にも受け取られることもできた。しかしすでに日中戦争は泥沼化して久しく、「戦死」が日常化するようになった上に、さらに戦争がエスカレートしてアジア・太平洋戦争となり、真珠湾・マレー沖大海戦の大勝利もつかの間の夢と消えてしまう。そして43（昭和十八）年5月のアッツ島の「玉砕」以降、南の諸島での「玉砕」が続発し、44（昭和十九）年10月のレイテ島沖決戦で「特攻死」が頻発するようになる<sup>20</sup>と、「戦死」は公的報道をはばかって隠微化し、「戦死者」も匿名化するようになった。しかも内地の相次ぐ空襲によって、日常的な市民生活のなかにも「戦死」が溢れかえることになった。「戦死」の「あわれ」とは、まずはこうして匿名化し、世の同情をもらえなくなってしまうほどにありふれた「戦死」の「あわれ」さであるのだろう。

それに加えて、「戦死」の「あわれ」は、「とおい他国」で「ひょん」と死ぬ「あわれ」さでもある。

そもそも「とおい他国」で、なぜに「兵隊」は死ぬのだろうか？

太平洋戦争に入ってからまだ一年も経たない1942（昭和十七）年10月、竹内は第二回卒業繰り上げによって徴兵されるのだが、それまでにすでに日本は、柳条湖事件以来、11年も中国に侵略軍を送り、そのために「とおい異国」で「兵隊」が「戦死」する事態は引き続いてきた。だから、竹内が入隊した頃になって、ようやく「兵隊」が「とおい他国」で死に始めたわけではない。だが、その死に方は、明らかに変わり始めていた。まず「とおい他国」が中国以外のアジアの全域——当時の言い方によれば「大東亜」なる圏域——に広がったし、また「戦死」が「勝利」の栄光で飾られる可能性は急速になくなっていったうえに、出征した兵隊が生きて帰還する望みは、ほとんど絶望に変わってしまおうとしていたからである。

竹内が巻き込まれていった戦争の推移をふり返ってみよう。



竹内の繰り上げ卒業になる半年前の42（昭和十七）年4月、アメリカの航空母艦から発進したアメリカ軍の爆撃機が、小規模ではあれ、すでに東京、名古屋などの各都市に対する最初の空襲を行っていた。もはや戦争を外地のこととして受け止める余地はなくなっていた。少なくとも、ハワイ・マレー沖での緒戦以来、大本営発表の「大勝利」の戦果に酔うことに慣れていた国民は、その熱気をいっぺんに冷やされてしまって、ほんの気休め程度の「防空演習」にもいやいやながら取り組む気になった。それにすぐ続いたのが6月のミッドウェー海戦で、日本の海空軍が大きな打撃をうけて敗北したことで、はやくも「太平洋戦争の大転機<sup>21)</sup>」が画されることになった。竹内が在京の中学校の同級生たちと『伊勢文学』を創刊するのはこの頃だが、それには間もなく10月、三重県久井町の中部第38部隊に入隊するのを見越して、気持ちの通じ合う友人たち人間としての抵抗線を確保しようとする切ない願望を表現したものであった。『伊勢文学』第一号（42年6月）には、早くも、竹内の「骨のうたう」の成立を予測するように、戦場での「兵卒」の死をうたった三村鷹彦の詩「戦争」が掲載されている。「何のためかわからず／ただ泥まみれ 血だるまになって／神も己れも うしなって 気が狂って／死んでいくあわれな兵卒<sup>22)</sup>」と、竹内を含む『伊勢文学』の同人たちには、ひとしくこのような無惨な死の段階が訪れようとしていた。

43（昭和十八）年2月、ガダルカナル島戦での敗北を、大本営は「転進」という言葉でごまかしたけれども、時を同じくしてヨーロッパでも、スターリングラードでドイツ軍が殲滅され、ソ連軍が反攻に転じつつあった。5月にはアッツ島の日本軍守備隊が「玉砕」し、7月にはイタリアのムソリーニが失脚、9月にイタリアが無条件降伏して、日独伊の三国同盟の一角は崩壊する。ヨーロッパでもアジアでも、しだいに世界の戦局の変化はどう覆いようもないものとなっていった。竹内は、7月17日付で久居から姉宛に出した手紙のなかに、「不幸な女中がそうするように」、「太陽をうしろにもった入道雲が、燃えて崩れて灰になった」のを、「バケツを下げて」見ていたと書き、すぐ続けて7月30日付の手紙では、「ほそながき／わが影かなしも／白壁に／帽子あみだに／うつりいるかな」という短歌を記しているが、ここにはその時点での竹内の不安な、取りようによっては不吉な自画像が投影されている。

その10月、竹内は三重県から茨城県の筑波飛行場に新しく編成された滑空部隊に転属、「挺身隊」の一員となる。筑波へ移ってからの竹内は、伊丹万作の知遇を受けたことを姉に知らせ、伊丹を真似て手紙を「カタカナ」書きにするようになっていたが、手紙の一つで、姉に「無法松の一生」を見ることを奨めている<sup>23)</sup>。伊丹は、この脚本のなかで、吉岡陸軍大尉の未亡人を思慕する人力車夫無法松の純情を描いているが、竹内は「戦死」した吉岡大尉の立場に、陸軍軍人である姉の夫の運命とともに、また自分自身の運命をも重ねていたのかも知れない。

44（昭和十九）年に入ると、太平洋戦線は日本にとっていっそうきびしい様相を加えていった。ニューギニア島、マーシャル諸島と攻勢を強めてきたアメリカ軍は、6月にマリアナ沖海戦で勝利し、7月7日には日本のサイパン島守備隊を全滅させた。7月18日には東条内閣が総辞職する。竹内の『筑波日記』には、「サイパンがやられ、東条内閣がやめになった」と記してから、辛辣



な感想を綴っている、「東条という人は、あまり好きでなかった。山師のような気がしていた。そして、こんどやめたということも、無責任なことのように思えてならない<sup>24)</sup>。」東条に対する批判の辛辣さは、「山師」によって自分たちが不可避的な全滅の運命の下に追いやられてしまっていることに対するやりきれなさとい体のものである。9月には、マッカーサー兵団とニミッツ艦隊がフィリピン反攻作戦にとりかかったことで、日本の国民にも事態の重大さが飲み込めるようになってきた。フィリピン戦線の切迫にともなって、大本営が「捷一号作戦」を発動、レイテ島決戦に陸海空の兵力を集中する作戦をとる。

だが日本海軍は、レイテ島沖海戦では、直前の台湾沖海戦で米海軍に大打撃を与えたという虚報を信じて戦ったために作戦の判断を誤り、武蔵を含む戦艦3、空母1、改装空母3、巡洋艦9、巡洋艦8、計24隻の沈没、その他戦艦大和の被爆、巡洋艦4の大破等々、ミッドウェー海戦に引き続く惨敗を喫してしまった。これで海軍の戦力を著しく減少した上に、レイテ島に上陸したアメリカ軍は、5つの空軍基地すべてを占領、ただちに使用を開始し、日本の空軍の制空権を脅かしはじめた。日本軍は、12月上旬に、レイテ島の飛行場奪回をめざして、落下傘部隊の降下、挺身集団のグライダー部隊による斬り込みと呼応した激しい地上戦を展開し、一時は空港の一部を占拠することに成功したが、それを確保できなかった。竹内が筑波で訓練を受けていたのは、こうした挺身隊による斬り込み戦術であったことを思い起こしたい。そしてこの間に島の北部のオルモック湾に上陸したアメリカ軍は、日本軍が海上補給の困難をおして集積していた大量の軍需品を押さえてしまった。武器と食糧の兵站を占領された日本軍は、レイテ決戦を失うことになってしまった。ついでアメリカ軍は、12月15日、レイテ島北部のミンドロ島、翌44（昭和十九）年2月28日にはパラワン島を占領して、飛行場を確保する。こうしてアメリカ軍は、フィリピン戦線での制海権とともに、制空権もまた完全に掌握し、東南アジアから台湾・沖縄海域にまでおよぶ戦局で一挙に優勢に立つことになった<sup>25)</sup>。日本の防衛戦は、これでいよいよ本土の周辺に限定されてくる。

竹内がフィリピンに送られた44（昭和十九）年12月には、主戦場がレイテ島からルソン島に移り、日本軍のフィリピン戦線は最終的な局面<sup>26)</sup>を迎えていた。竹内は、内地勤務のまま4年で「満期除隊」になる可能性にかすかな希望をつなぎ、それを夢にまで見ていたが、その可能性は44年の前半までに消えていた。それどころか髪のと爪を切り、死後の遺品としてそれらを自分の名を記した封筒に納めておかなければならなくなっていた<sup>27)</sup>。

それにしても竹内が送り込まれた日本軍のフィリピン戦線はひどい状態にあった。「捷一号作戦」が破綻していたとうだけではなく、マニラにいた寺内南方軍総司令官が司令部をサイゴンへ移して作戦指導を放棄し、富永第4航空司令官が台湾へ逃亡するなど、日本軍の側は作戦の見通しも指導責任も欠落した状況にあった。そのさなか、45年が明けて1月9日、アメリカ軍は猛烈な砲爆撃の後にリングエン湾南岸に兵員7万人という大量の兵力を揚陸する。そして2月にはマニラ市に突入、3月にはフィリピン諸島の再占領を進めるとともに、ルソン島北部にも圧力を加え、地上軍の焦点はバギオからパレテ峠にわたる山岳地帯に移ってゆく。

すでにこの局面で、45（昭和二十）年2月14日、天皇に対して近衛文麿の「上奏文」が提出されていたことが、今日では明らかになっている。「敗戦ハ遺憾ナカラ最早必至ナリト存候」と認め、「満州事変以来今日ノ事態ニマテ時局ヲ推進シ来タリシ軍部内ノ一味」を「一掃」する「非常ノ御勇断」をもって、「速ニ戦争終結ノ方途ヲ講スヘキ<sup>28)</sup>」だ、というのである。だが天皇は「国体護持」の条件を有利にするために望みのない戦いを継続することで、全国の都市空襲、沖縄戦、広島・長崎への原爆投下などいたずらに国民の犠牲を増大させることになった。仮にこの2～3月の時点で天皇が敗戦を決断していたならば、もちろんルソン島で絶望的な戦いを余儀なくされていた竹内にも、生きて帰国する機会が与えられたはずであった。

竹内がその所属の「挺身隊」とともにフィリピン戦線へ送られた状況については、桑島、小林によって、いくつかのことが分かっている。

まず「挺身隊」とは、グライダーで戦線に降下し、斬り込みの任務にあたる部隊である。これは、戦中の国民歌謡で「空の神兵」（梅木三郎作詩・高木東六作曲）と讃えられた「落下傘部隊」とは別で、「斬り込み」という肉弾戦の発想に立った戦闘の実態は、ある種の「特攻隊」と呼ぶべきものであった（桑島の著作の題名は、「空の神兵」の第三聯に、落下傘部隊が降下する様を「純白の花負いて」と形容しているところから来ているが、これは桑島が竹内の所属する「挺身隊」を落下傘部隊と誤ったためであった<sup>29)</sup>）。

竹内は、最終的には第一挺身集団の歩兵第一聯隊第一中隊に編成された。第一挺身集団は、44年12月6日に第二挺身師団がレイテ決戦に投入された後、本土決戦に備えて再編成された組織で、師団と称するには兵員が足りなくなって集団といわれた。第一挺身集団は、第二挺身師団がレイテ決戦で玉砕するのを放置しては「武士道が立たない」と頑固に主張する集団司令部の意見によって、ルソン作戦に投入されることになった。そのため12月21日、竹内たちは、先発第二陣として、輸送船二隻（「日向」「青葉」）のいずれかに分乗して門司港を出発、29日にはフィリピンのサンフェルナンドに上陸した。兵員は全員上陸できたが、貨物の陸揚げ未了のうちに空襲を受け、装備の大半を失った。夜半には「日向」「青葉」も炎上した。（第一陣も、航空母艦「雲竜」に乗って竹内たちに先発したが、すでに台湾沖で敵潜水艦に攻撃されて沈没していた）。最初から装備と食糧とを失うというきびしい条件で戦場に立たされたのである。しかもこの時点では制空権は完全にアメリカ軍側にあったのだから、空挺作戦は最初から不可能であった。竹内の所属する中隊は、かろうじてクラーク基地に到着し、集団長の統率下に入った<sup>30)</sup>が、残された戦術的な選択は、「最後の兵になるまで敵陣に斬り死をおこなう」と言うことに尽きた<sup>31)</sup>。

竹内の「戦死」が、伝えられているように4月9日、バギオの高地の戦いにおいてのことであったとするなら、その戦いとは、おそらく攻勢に立ったアメリカ軍の戦線が山地に展開していく過程のいずれかの遭遇戦のことであっただろうが、ひょっとすると地域住民のゲリラ部隊との衝突であった可能性もあったのではないだろうか。事実日本軍は、アメリカ軍がルソン島に上陸すると、全住民がゲリラ化するのを懸念して、44年11月からゲリラ団の討伐を開始していたからである。輸送船の約八割が沈められるという状況のなかで、武器・食糧・兵員ともに底をついて

いたから、日本軍の食糧徴発・盗奪は、現地住民の敵意を駆り立てずにはおかなかった。「当時のバギオの最大の脅威は、わが守備隊（山下軍司令部には直属衛兵一箇中隊だけ）に数倍するゲリラの布陣だった<sup>32)</sup>」という証言もある。侵略戦争にともなう不可避的な悲劇であるが、「兵隊」の「戦死」は、ゲリラの「討伐」、現地住民の「戦死」によって担保されているわけだ。このような「戦死」は、およそ竹内の感性と思想とは似つかわしいものではないけれども、しかしその可能性は排除できないだろう。だが竹内には、そのようにしてまでも生きる選択肢をなんとしても拒否して、戦わず、奪わず、殺さないで「戦死」する可能性がないわけではないだろう。つまり手近にある何かの武器を利用して自死するか、いまひとつは野垂れ死ぬことである。

竹内がどのような形で「とおい異国」での「戦死」を詩作の段階で具体的にイメージし、自分の未来に予感していたのかは明らかではないけれども、表現されている言葉、語られた言葉は、その後に現実に生じた彼の「戦死」の形のあらゆる可能性を含み込んでいる。考えてみればあきらかなことだが、「とおい異国」で「戦死」するということは、正規の武装勢力である敵との戦いにおける死から、現地住民の敵意と憎悪のなかでの死、武器をみずからに向けた死、さらには糧食尽きて山野で野垂れる死までの、あらゆる戦場での死に方の選択があり、その振幅のなかで死ぬということであったはずである。「兵隊」の「戦死」の「あわれ」さに、単純な被害感だけを読みとってすますならば、まったくの誤りであるといわなければならない<sup>33)</sup>。

ただし、竹内の「戦死」を「公報」が伝えている日付の45年4月9日よりも後、4月末に、バギオ北方で竹内と名札を付けた兵士が、空挺隊の折り畳み銃と米との交換を求めていると証言もあるらしい。そこから竹内は現地住民のなかで生存しているのではないかという望みもうまれた。いかにも人なつっこく、生きることを大切にし、食欲の盛んであった竹内のイメージに相応しい伝聞であるが、これは疑わしいようだ<sup>34)</sup>。

竹内の「戦死」以降の戦争の経緯についていえば、4月23日には、アメリカ軍がバギオ市に突入して26日に占領、5月23日にはパレテ峠も占領する。日本軍は、この北部地帯の戦線では、玉砕戦術をとらず、持久戦で戦ったが、食糧も戦力も乏しく、飢餓と彷徨のなかにおいやられていったが、それはまた地域住民ゲリラとの衝突のなかで、兵隊の生命が消滅していく場合を増やすことにもなった。その間に、太平洋戦争の全局の重点は、ようやく沖縄攻防戦に移っていき、沖縄戦では、竹内の段階では「戦死」のなかに予測もされていなかった新しい形、すなわち日本軍によって殺された沖縄県民の「戦死」が付け加わることになるが、その議論にはここでは立ち入らないことにしたい。

## 六

フィリピンにおける「捷一号作戦」は、「インパール作戦」となれば、最大の愚行であったという軍事史上の評価があることを省みると、竹内たちの兵団が44（昭和十九）年12月になってルソン島に投入されたことには、いわば死地にむざむざと赴かせられたという思いを深くせざ

るを得ない。「兵隊」が死ぬことになったのは、いまにしていえば、こうして敗色濃厚な戦場へ、「国体護持」の時間稼ぎのために、捨て駒として兵員を投じた誤った作戦の必然的な結果であった。その死地が「遠い他国」であるのは、「大君」のための戦争が南瞑の果ての「他国」にまで無謀にも拡大されていたからであった。その「他国」が「とおい」のは、たんに地理学的に遠いというのではなく、「兵隊」の感情にも意思にも染まぬ戦争、「祖国」においてこそなすべきことがあるという思いをいっぱい残しての出征に駆り立てられたものであったからだった。「兵隊」の「死」は、本人に予見はされていても、けっして覚悟したものでも望んだものでもなく、ある種の運命に引さらわれるように「ひょん」と訪れるものであった。この外的な必然性に対する無力感、偶然に出現する死の手の予見しがたさ。こうして、「だまって だれもいないところ」で「ひょんと死ぬる」ことの「あわれ」とは、疎外と孤独のなかで、生をむりやりに断念しなければならない、歯ざしりするような無念の思い、断腸の絶望なのである。

この思いを伝えているのは、竹内が「戦死やあわれ」と云い、「兵隊の死ぬるやあわれ」と繰り返していることである。竹内は、すでに匿名化し、一般化しつつあった「戦死」が、ほかならぬ一人ひとりの個性と生活とをもった「兵隊」の特殊な「死」であることを強調せざるをえなかったのである。何よりも竹内自身が、そうした個性と生活の主張を生のに濃厚に残している「兵隊」の一人であった。その「兵隊」としての「あわれ」さは、また竹内自身の入隊後に追体験するところとなった。かつての『伊勢文学』の仲間たちが受けた「幹部候補生」や「予備学生」という軍隊内の処遇は、竹内のようなふつうに入隊した「兵卒」よりははるかに自由に恵まれており、時間的にも余裕があることを発見することになったからである。竹内も、一般兵士に対して特別操縦見習士官になる制度が開かれたことを知って、「シマイマデ下積み」である状況を抜け出すためにいったんは試験を受けることに心が傾いたのだが、「スグ定員二満チテ」その話は「才流れ」<sup>35)</sup> になってしまった。

おそらくは、こうした時の心情を綴ったものであろう。詩を書けという友人の中井利亮に宛てて、竹内は次の詩を載せた「鉛のような」手紙を返してきた。

うたうたいは

うたうたいは うたうたえときみ言えど 口おもく うたうたえず。うたうたいが うたうたわざれば 死つるよりほか すべなからんや。魚のごと あばあぼと生きるこそ 悲しけれ<sup>36)</sup>。

竹内は、「無名ノ一兵卒トシテオウル」ことにかかわる問いをみずからに投げかけ、詩人としての自分の苦悶に立ち向かった。「無名ノ一兵卒」はたしかにそれで「立派」であるとしても、それを超える「立派」さを自分は詩に託すべきだと考える。だが実際には、自分の詩を「心ヒソカニホコリ」に思えなくなっている。それは、「軍隊へ入ッテカラバカニナッタ」<sup>37)</sup> からだ、と

いう結論を出す。その後の『筑波日記』には、「一兵卒」として生きる覚悟を決めた竹内が、あらゆる機会を貪欲に生かし、さまざまに工夫を凝らして時間を生み出し、本を読み、映画にも触れ、地域の人々や子どもたちと交流し、食べる楽しみを忘れまいとして、精いっぱい気を使っている痛ましい努力が目につくようになる。もっとも竹内は、『筑波日記』は、「フルイニカケテ書イタモノ」であり、たしかに「ウソガナイ」にしても、「本当ナコトハ云エナイ<sup>38)</sup>」と断っているのだが。

そのような「兵隊」であればあるほど、竹内にとっての自分の個別的な、人間としての掛け替えのなさ、まさに彼になじみ深い「ふるさとの風」、彼のすべてを知りつくし、彼の内面を充たし続けている「こいびとの眼」のかけがえのなさであった。竹内は、「骨のうたう」の「原型」が書かれた頃、集中的に作品を書き残しているようだが、そのなかに「メンデルスゾーンのヴァイオリンコンチェルト」という詩がある。メンデルスゾーンの曲は、若草山のそよ風の中、「をなごの目」に雲が映り、彼女の声を聞くというように、ロマンティックなイメージに移し変えられている<sup>39)</sup>。現にその頃竹内は恋していたレコード屋の娘があったが、その結末は失恋に終わった。それでもその後また友人の妹との新しい出会いがあり、「阿蘇」の風景を伝えてくれ、兄が山中の竹に刻み込んだ竹内の名を見に行ってきたいと書き送ってくる彼女について、「深入りしそうな気配に、ぼくの気持ちかなりかけている」と日記の中に書き残す。自分の誕生日が「みどり葉の五月」であることをくりかえし喜んで詩にうたい、学生時代には帰省すると伊勢の海の香りを嗅ぎに行く竹内には、「ふるさとの風」と「こいびとの眼」はいつも一つに結びついて、彼の青春の生命を薫り高く証しているのであった。もちろんこうしたことは決して竹内に限ったことではない。いくらかでも「青春の真昼前」を「国に捧げる」<sup>40)</sup> 運命の下におかれた「兵隊」たちの「死」を目前にした書き物を読んだことのある人なら、ここで竹内がうたっているのは、同時に無数の色合いの「こいびとの眼」であり、「ふるさとの風」であったことを知っているだろう<sup>41)</sup>。そのかけがえのないもののすべてを「ひょん」と消してしまい、「兵隊」の「戦死」としておしなべてしまう「あわれ」さ。何よりも一人の「兵隊」たる竹内にとっては、「ふるさと」も「こいびと」も、彼がそのために死のうとするものではなくて、反対に、それらのためにこそ生きてきたのだし、生きたいと思ってきたものであった。

竹内の「骨のうたう」では、「ふるさと」も「こいびと」も、彼がそれらのために死のうとけっしてうたってはいいないことを、ぜひとも強調しておかなくてはならない。

戦中の多くの「兵隊」たちは、『聞けわだつみのこえ』に残されているさまざまな手紙や、特攻隊員の多くの遺書などに示されるように、天皇とその国家による侵略戦争に「蒼」の「いのち」を捧げることを正当化できずに苦しみ抜いた<sup>42)</sup>。ある者は、ひたすら死ぬことだけが日本の未来の新生につながるのだと、あえてみずからの死を日本の過去の終焉につなげる運命を肯んじようとした<sup>43)</sup>。またある者は、学徒兵にだけ特攻の犠牲を押しつける帝国海軍内の差別に抗議し、学徒兵としてのプライドと連帯を守るために死ぬのだと、無理やりに自分の死を自分に納得させる論理をつくりあげた<sup>44)</sup>。中国の学徒兵の存在や、「匪賊」の死に臆せぬ眼差しに、みずからの戦



いのアイデンティティを鋭く問いつめられた兵隊の死もあった<sup>45)</sup>。こうしてなかには、天皇のために死ぬことができず、ただ肉親を護るためにだけ死ぬ<sup>46)</sup>のだと考え、すでに「国体」を延命することが日本の課題となっている状況下で、ただ非戦闘員を巻き込んで祖国を玉碎の悲劇に直面させる事態を回避するためにだけ、かろうじて死ぬ意味を見ようとする者もあった<sup>47)</sup>。

こうしたさまざまな「戦死」を納得させる論理がありえたなかで、そしてそのいずれの「兵隊」の「戦死」も、その心は、まことに「あわれ」であったのだが、竹内の場合、けっして「戦死」に納得する論理を提出していないところに特徴があった。「国のため／大君のため」に「死んでしまうや／その心や」とうたうとき、その「戦死」する「心」は、「死」の理由とは別の所にあった。「国」のため、「大君」のためという「戦死」とは、竹内にとっては、外的に強制された、きわめて心外な、どう納得しようもない「死」の理由づけにすぎないことは、「死んでしまう」という突き放した言い方によってはっきりと表現されている。そしてなによりも竹内は、「ふるさとの風」や「こいびとの眼」のために生き、そのためにこそまた詩を書き、映画を作りたいかったのであって、だんじてそれは竹内が死ぬべき理由などではなかった。

竹内の母方の従兄弟大岩保は、竹内が入営する際のエピソードを思い出している。

彼がいよいよ【宇治山田市の】吹上町の家から入隊するため、東京を立つ夜のことでした。小さく光る星空の下を、僕達の住んでいた椎名町の家（今は南長崎一丁目）から、大きなリュクサックを背負い、子供のように大きな声を張り上げて、「兄さん、おれ征きたくないよう」と、ワァワァ泣きながら八幡様の露地裏に消えて行きました<sup>48)</sup>。

おそらく竹内が、「大君」と言うとき、それによって内容的に指示されているものが、天皇制であるのは明らかであるとしても、竹内が直接的にイメージしていたのは、小学校で教育勅語の奉読のときに最敬礼させられてきた御真影であったり、学校の正門を入るとすぐに厳めしく建てられていて、かならずその前を通る時に最敬礼をしなければならなかった奉安殿であったり、ひょとするとどこかの練兵場で白馬にまたがり、軍装で閲兵をしている天皇の写真（かつて「戦中」に名古屋に住んでいた頃のわが家にもそんな写真があった）であったりしたのではなからうか？

そして「国」の場合にも同じように、その言葉が指示するものはまさしく天皇制国家であることは言うまでもないとしても、直接的にイメージされていたのは、天皇のそうしたイメージに付いて廻る人物、とりわけ東条首相<sup>49)</sup>であったのではないか？ さらには仰々しい国家行事や儀式や制度、お役人で固めた役所や、鉄砲・大砲から軍艦・飛行機にいたる武器で武装した軍隊、そしてサーベルを下げては日常生活を睥睨している警官たちのたむろする警察といった強制装置の数々で、それが映画のスティールのように対象の特長を誇張し、デフォルメされた一続きのショットとしてとらえられていたのではなかったか？ 新全集に掲載されている竹内の数々のマンガは、彼の感性の絵画性、映像性をうかがわせるに十分である。マンガには、「四面軍歌」のように、シューベルトのレコードを聴こうにも軍歌ばかりが聞こえてくるといった戦争文化に取り囲まれ

ている状況への強い嫌悪を表現したものがあつたし、大砲や機関銃で撃ち合う戦闘場面もあった。日独防共協定を皮肉った「防共の人垣」は、長城の石垣を長蛇の兵列で表現していた。「反共」を掲げた三国同盟への日本の参加が、文字通りに人間の盾を犠牲とした戦争の遂行となるという事の本質を、見事に衝く絵柄であった。

竹内の絵画的センスのこうした鋭い批判性は、中学校時代に漫画雑誌の一年間の発行禁止措置を受ける原因となったが、再発刊した漫画誌『ばんち』（1937年秋）——この年は、竹内が旧制中学校の最終学年の年であり、またこの年の7月には日本は蘆溝橋事件によって「日中戦争」に本格的に乗り出していた——の「デ鱈目ニウス」には、「カンゲキの血染めの血書 / 北支事変の生んだ美談」と題した、きわめて刺激的な記事が出て、学校側の物議を醸すことになった。それは、宇治山田の憲兵隊に「大日本帝国バンザイ」という血書を届けた男があり、将校を感激の涙にむせばせたのだが、その男が記者に答えたというのが、つぎの話であったという。「ナーニありア豚の血なんです、（苦笑して）インクがなかったものですから、あれだけのものでアンナカンゲキされるとは思ってませんでした<sup>50)</sup>。」

いまひとつ、竹内の「国」にたいする批判を示すものとして、戦中に国民意識を高揚するために小学校唱歌として教えられていた「ヒノマル」の歌の替え歌を挙げることができる。戦中にさまざまな替え歌が作られて、国民の厭戦気分の捌け口となっていたことはよく知られているが、そのうちでもこれは最もラジカルな批判を盛り込んだものの一つであろう。

#### ヒノクルマ（ヒノマル）

アカジニクロク（シロジニアカク）  
ゼーキンアゲテ（ヒノマルソメテ）  
アアクルシヤ（アアウトクシヤ）  
ニホンノクニハ（ニホンノハタハ）

クロジニノボル（アサヒニノボル）  
イキオイミセテ（イキオイミセテ）  
アアイタマシヤ（アアイサマシヤ）  
ニホンノクニハ（ニホンノハタハ<sup>51)</sup>）

よくこれが「戦中」に憲兵と特高警察の検閲の網にかからなかったものだと思うほどの辛辣さである。また大学繰り上げ卒業で三重県の久居で入隊した前後に書かれたエピグラム「鈍走記」が『伊勢文学』に掲載されている。そこでは伏せ字になっている部分は、草稿によって起こされたものである。

このやや長い文章は、まず次の言葉から始まる。

生まれてきたから、死ぬまで生きてやるのだ。  
ただそれだけだ。

少し後に次の言葉がある。

もし、軍人がゴウマンでなかったら、自殺する。

これは、冒頭の主意の対極にある含意をもっていることは明らかだろう。軍人、とくに日本の軍人は、統帥権を背景にしてあたかも軍人に非ずんば人でないかのごとき増上慢にふけり、戦争によって自国・他国の人間を殺害するのを聖なる職務だと豪語している。これは、およそまともな分別をもつ人間ならば、とうてい耐えうるかぎりの職務ではあるまい、というのである。その上で、つぎのエピグラムを読みたい。

××【戦争】は ×【悪】の豪華版である。

＊

××【戦争】しなくても、××【建設】はできる。

たしかに山東出兵、柳条湖、蘆溝橋と19年、もしくは15年間にわたって戦争を続け、日独伊三国同盟を結んで、全世界を殺戮の巷、灰燼に帰し、原子爆弾でもって閉じられた第二次世界大戦を日本は先導したのであったから、竹内の目前にしたのは、まさしく「悪の豪華版」であった。大東亜共栄圏の「建設」というのが、日本の国家の掲げた大計であったが、それが「悪の豪華版」である「戦争」によって可能になるというところに、その「神国日本」の「八紘一宇」の「大御稜威」なるものの根本的な錯誤があり、嘘がある、と竹内は見抜いているのである。

では竹内は、その「戦争」にどう立ち向かうのか？ その問いに対して、当面、竹内が個人として出した答えは、徹頭徹尾、「生きてやる」という決意をかためることであった。

『伊勢文学』のこのエピグラムは、次の言葉で結ばれている。この部分は草稿にないから、原稿提出時に書き加えたものであろう。

いみじくもこの世に生れたれば、われいみじくも生きん。生あるかぎりひたぶるに鈍走せん。にぶはしりせん<sup>52)</sup>。

「いみじくもこの世に生れたれば」「いみじくも生きん」——この古典的なニュアンスをもった「いみじくも」は、竹内の人生への強い肯定を言い得て妙である——といい、「生あるかぎりひたぶるに」「にぶはしりせん」と、マイペースを押し出す。「鈍走」ないしは「にぶはしり」とは、体育や教練の時間に、いつも走ることが不得手で、落第点をとることをあえていとわなかった竹



内が、自然に会得した一つの「哲学」であったと言えるだろう。国民の歴史が間違っ「一億玉砕」のコースをひた走りはじめていたとしたなら、あらためて「生きる」コースへの分岐点へ引き返すのにいちばん近く、早いのは、「鈍走」する者である。だから「にぶはしりせん」という竹内の決断は、まちががなく時代の真理を見ぬいた賢者の言葉であったといえるのではなかろうか？

竹内のこのエピグラムの立場が、たんなる一時の思いつきと言ったものではなかったことは、『筑波日記』1の裏表紙に、「大君」に対して竹内が直接ぶっつけている肉声によって示されている。

赤子

全部ヲオ返シスル

玉砕 白紙 真水 春ノ水<sup>53)</sup>

ここで、最初の二行の意味は、はっきりしている。「赤子」——「せきし」と読む——というのは、天皇を親に、臣民を赤ん坊に見立てて、天皇の「聖慮」・「聖断」に対する臣民の無知・無力、絶対的な随順、全身全霊を挙げ、命を捨てる誠と献身とを特徴づけた言葉である。桑島が書いているように、この「赤子」のなかに、九州の炭坑へ強制徴用されながら、「テンノウヘイカバンザイ バンザイ」と叫ばされた朝鮮人労働者たちを含めるべきである<sup>54)</sup>とするなら、さらに竹内の同年兵の二世宮城島信平もまたまごうことなき「赤子」であった。ロスアンジェルス生まれで、その名前からしておそらくは沖縄出身の家族をもつこの二世「兵士」は、竹内が炊事場で一銭の貨幣を拾った時に、"You are a lucky boy!"<sup>55)</sup>と祝福してくれて以来、竹内と親しく話し合うようになっていた。この「祖国」と「敵国」<sup>56)</sup>の間に身を引き裂かれている「赤子」の苦悩に竹内も接する機会があったのではないだろうか？

いずれにしても竹内は、そのような「赤子」のすべてを「オ返シスル」というのである。そうとすれば、その名宛人はただ天皇、「大君」だけしかない。そして当然ながら、「オ返シスル」べきものに、「玉砕」という、いっさいの生きる希望を断念した死のための死も含むというのが、竹内の上の走り書きの文意なのだろう。もちろん「戦死」の意味には、これと対極的なものがある。たとえば最近わが国でも公開されたアメリカ映画「マジェスティック The majestic」が主題としているように、アメリカの場合には、少なくとも第二次世界大戦で「戦死」した兵士の名において、「アメリカ合衆国憲法」の修正第一条が規定する信教、言論・出版、集会、請願にかかわる人権の不可侵性を直接的に正当化することが可能であり、そのゆえにまた自由と民主主義のための戦争による「戦死」は、マッカーシズムの荒れ狂う「戦後」においても、真っ正面から「非米活動委員会」を非難し、その圧力をはね返す歴史的な権原を構成することになった。けれども、日本の「赤子」としての「戦死」は、一樣に、天皇の絶対的な主権と旧「日本帝国憲法」を正当化するための死に還元されてしまって、新「日本国憲法」の人権条項に直接しない、断絶

された死である他はなかった。竹内について言えば、そのような状況としての「玉砕」が存在し、それをみずからの直面するべき現実として引き受けなければならないことは、入隊後の竹内には分かりすぎるほど分かっていた。当時の竹内にとっては、「玉砕」は、どうしても主観的には受け入れがたいのに、客観的には不可避的な必然性として竹内の未来を確定的にしていた。たしかに竹内は、すでに戦局の進展から考えて、「玉砕」が自分の運命となることは予感していたが、けっしてそれを好ましいものとは考えていなかった。竹内が「戦う」のも、「子ども」が空襲で殺されるなど、アメリカの戦争が無差別都市爆撃によって、一般市民の殺戮に及んでいることが許せないと思ったからであり、かつまたそうした制約の下で生きざるをえない条件があったためであって、けっしてみずから望んで死ぬ場所をもとめるためではなかったし、またひたすらに「敵」を殺すためでもなかった。そのために竹内は、「敵」という言葉を使っているが、例は少ないし、そのイメージも希薄であった。少なくとも、『筑波日記』に見える竹内は、演習の匍匐のなかで草花に目をやり、水たまりを楽しみ、兵舎で捕らえた子ネズミに肉ジャガを与えて、そっと林に逃がしてやるような、「いのち」に対する天性の喜びと優しさを個性とする兵士であった。

この心情的な非戦の願望と状況的な玉砕の絶望とのはざまは、竹内にあってはあまりにも大きい。そのはざまのうちにおかれた竹内の判断停止状況を示すのが、先の走り書きの終行に、「玉砕」という言葉に続く「白紙」という言葉ではなからうか？ そしてさらにそれに「真水」という言葉が続き、「春の水」というイメージがそれに被さってくる。「真水」とは、「玉砕」に凝り固まった先入見をとりさると見えてくるじぶんの命の澄明さの自覚であり、「春の水」とは竹内の好きな緑の5月、陽光の下でゆったりと流れながら、天地に生命を甦らせる創造と自由の喜びなのではなからうか？ いずれにもせよ、竹内の気持ちは、ここでも「玉砕」よりもはっきりと生きることに向かうのである。

それにしてもこうして竹内の「骨のうたう」の第一聯を詳しく見ていくと、その詩想の基調は、死の詠嘆によりも、生への哀惜におかれており、「こいびとの眼」も「ふるさとの風」も、そのために死ぬべきものとしてよりも、むしろ生きること执着し、「戦地」にあってなお「兵隊」に生きていることを証しとし、はげますものであったこと、それゆえにまた「兵隊」の「戦死」は、「国」と「大君」に掛け替えのない命を捧げることへの共感ではなく、「赤子」たることを強制されたことへの「あわれ」さにおかれていることがはっきりしてくる。

まったくの仮定なのだが、竹内がああのような戦争体験を経てなお生きて帰還することが可能であったとしなら、そして彼が『筑波日記』1に書き付けた切ない衝動を、それとは知らずに自分の判断で実行した戦艦武蔵の乗り組みの少年兵が実在したことを知ったとしたら、竹内は何と言うだろうか？ その少年兵は、戦艦武蔵に乗ってレイテ海戦に参加し、九死に一生を得て戦後に生きのびるのだが、天皇が戦後如何なる戦争責任を負うこともなしに、戦後の象徴天皇として生き続けようとしてときに、兵籍番号「横志水三七五二四六」の一水兵として、およそ天皇に負ってきた「金品」のすべてを返上した<sup>57)</sup>であった。

竹内は、「三ヶ月もたてばばくも征く」ことになっていた頃、つまり43年の6~7月頃に作っ

た「ぼくもいくさに征くのだけれど」という詩の中に、次のような言葉を残している。

ぼくがいくさに征ったなら  
一体ぼくはなにをするだろう てがらをたてるかな

だれもかれもおとこならみんな征く  
ぼくも征くのだけれど 征くのだけれど

なんにもできず  
蝶をとったり 子どもとあそんだり  
うっかりしていて戦死するかしら

そんなまぬけなぼくなので  
どうか人なみにいくさができるよう  
成田山に願かけた<sup>58)</sup>

戦争に「征く」ことについては、蝶をとったり、子どもと遊んだりすることなど、およそ戦争と無関係なことへの想像が克っていて、役立たずな自分の未来は、いきなり「戦死」に結びついてしまう。その未来予測に対する保証は、ただ「成田山」に詣でると云ういかにも頼りない便法でしかなかった。といっても、伊勢神宮の膝元にありながら、天皇家の祖先神であり、かつ当時は国家神道の総元締めに祭り上げられていた伊勢神宮に祈願をしたとは言わないところが、いかにも竹内らしい<sup>59)</sup>。

竹内の「骨のうたう」の第一聯は、ここでの「戦死」の予感の延長上で書かれたものであった。そしてその実際の「戦死」は、竹内の善意や楽観をあらゆる意味で裏切っていた可能性が多い。それだけにまた、「骨のうたう」の歌い出しにうたわれている「兵隊」の死の「あわれ」さはいやまさることになる。委細なすべての含意と情念とを沈めた深い淵に木の葉洩る光を当ててたように研ぎ澄まし、きらめいている平明な言葉。岩間を伝うせせらぎのように、読む者の心に残響を引きながら沁みいってくる語り口。

## 七

竹内の「骨のうたう」は、第二聯にきてさらにそのすごさを増す。というより「骨のうたう」のすごさは、まさに第二聯にこそあり、それも「完成稿」の第二聯よりも、「原型」の第二聯にあるように思える。「日本が見えない」や「よく生きてきたと思う」の発見は、いっそうその感じを強くしてくれるようである。

「日本が見えない」は、竹内にとって本質的な見る営みが破壊され、消え失せてしまった局面として、「兵隊」の死をうたっている。「よく生きてきたと思う」は、その死の瞬間に「兵隊」の心に映ずる自分の人生のフラッシュバックとして理解できる<sup>60)</sup>のではないだろうか？そして「骨のうたう」では、ふたたび「戦死」した「兵隊」の視点に立ち返り、「兵隊」が「骨」になって「日本」に返ってくるとが主題になる。「日本が見えない」という嘆きは「骨のうたう」第一聯で「戦死やあわれ」と受け止められる。そして第二聯では「兵隊」が「骨」になり、その「骨」には日本がどう見えるのかがうたわれていく。

そのような関連においてみると、未発見の二篇の詩のうち「日本が見えない」を「骨のうたう」の前に置いた新全集の編集は適切であったと言えるが、「よく生きてきたと思う」は、「日本が見えない」に続けて、「骨のうたう」の前の位置においたほうがよかったのではないかと？

私なりに受け止めたこうした詩想の流れのなかにおいてみると、「原型」の第二聯と「完成稿」のそれとの間にある違いの大きさがいやおうなく目立ってこざるをえない。

先にも問題にしたように、「原型」の第二聯の最初の三行のうち、二行目の「こらえきれないさびしさや」が「完成稿」の終わりから五行目に移され、一行目の「苔いじらしや あわれや兵隊の死ぬるや」と、三行目の「なかつ 咆えず ひたすら 銃を持つ」とは、除かれてしまっている。このことは、明らかに、「補作」が「苔」と読むことで生じる詩想のさまざまな混乱に向き合わず、それを回避したことを示しているのではなからうか？

私なりにこだわっている疑問を解きほぐすには、竹内が『筑波日記』2に書き残している或る詩を思い出すのが有益である。44（昭和19）年4月14日の日付をもつこの詩は、日記を綴るうちに、いつしか詩境に入ってしまった竹内の天性の詩的素質をうかがわせる点でも興味深い。

戦争ノハナシ。 戦争ノハナシ。 マッチ箱ノ大キサノモノデ、軍艦ヲ吹ッバス発明ガナサレタハナシ。 イイカ。 イイカ。

ミタミワレ。 イイカ。 イケルシルシアリ。 アメツチノ。 サカエルトキニアエラクオモエバ。 イイカ。

ボクガ汗ヲカITE、ボクガ銃ヲ持ッテ。

ボクガ、グライダァデ、敵ノ中へ降りテ、

ボクガ戦ウ。

草ニ花ニ、ムスメサンニ、白イ雲ニ、ミレンモナク。

チカラノカギリ、コンカギリ。 ソレハソレデヨイノダガ。

ソレハソレデ、ボクモノゾムノダガ。

ワケモナク、カナシクナル。

白イキレイナ粉グスリガアッテ、

ソレヲバラ撒クト、人ガ、ミンナタノシクナラナイモノカ<sup>61)</sup>。

ここでは、戦争談義の話しを「イイカ」と繰り返し念を押しながら書いているうちに、「軍艦ヲ吹ツトパス発明」についての話しになり、「ミタミワレ」のステレオタイプ的な「赤子」言説を前置きにしながら、いつしか竹内の心は、詩を刻みはじめていく。そして「ソレハソレデヨイノダガ」までの部分をたどっていってみると、それはそのままに「原型」の第一聯から第二聯の最初の三行までのモチーフを再現したものであることに気がつく。「草二花二、ムスメサンニ、白イ雲二、ミレンモナク」というたい方は、「こいびとの眼」や「ふるさとの風」が「ひょんと消ゆる」と表現しているものなのだ。時間的に見てみると、この『筑波日誌』2の詩の方が「原型」よりも後に書かれたものであると考えられるだけに、竹内は、はからずも、「骨のうたう」の表現が生まれてきたモチーフをこういう形でたどりなおし、解き明かしていることになる。

「ボクガ汗ヲカイト、ボクガ銃ヲ持ッテ」とうたい、続けて「ボクガ、グライダァデ、敵ノ中へ降りテ、ノボクガ戦ウ。」と書かれた言葉は、「原型」のいくらか一般化された「兵隊」と「銃」という語句を、一挙に竹内の個別的な戦闘行為を描きだす具体的なイメージに結びつけていく。「原型」の第二聯の「泣かず 咆えず ひたすら 銃を持つ」のは、ここでは他ならない竹内自身の自我像として示されている。そして「ボクガ、グライダァデ、敵ノ中へ降りテ」、「銃」をもって「ボクガ戦ウ」のだと、戦争の修羅場、限界状況に結びつけて自分を二重に確認する言葉を重ねているのに引き換えて、先にも指摘したように、「グライダァ」で降り、「銃」をもって戦う「敵」——この「敵」とは、現実においては、けっしてアメリカ兵とは限らず、地元のゲリラ兵であるかも知れなかったが——のイメージは、あまりにも抽象的で、漠然としている。それでもはっきりしていることは、訓練を通して竹内が実感している「滑空隊」と言い、「空挺隊」と呼ばれている軍隊の実態は、「銃」をひたすら唯一の武器としてもつだけの特攻隊であったということであった。そのような非力な武器と兵員で強敵に向かわなければならない戦争の実態は、泣いても、咆えても、どう変えようもないこととして、「原型」の第二聯の最初の三行の意味が説き明かされている。

こうして『筑波日記』2に残された詩は、「原型」の第一聯と第二聯とのつながりをつけ、第二聯の最初の三行にいたるまでに竹内が刻もうとした自己イメージを再現する上で、きわめて重要な意味をもっていることが分かるであろう。

逆にそのことは、「完成稿」の問題点をはっきりさせることにもなった。

「完成稿」は、第一に、「苔」と読むことで意味不明の困惑に陥り、決定的な重要さをもった「原型」三行目の「銃をもつ」という言葉の表現するイメージを削除してしまった。何よりも「銃」とは、挺身隊員の竹内を特攻死に特定する象徴的な武器を指示する言葉であったし、竹内がその銃口の彼方に如何なる人間を「敵」としてとらえることになるのかという問いにつながる言葉であったからである。さらにもっと言えば、端的に陸軍の「銃」とは、菊の紋章を刻印した、明治38(1905)年型の三八銃のことであり、すでにアメリカ軍が大量に装備していたような、腰ダメで連続発射の可能な自動小銃の時代からは完全に後れた、古色蒼然といってよい遺物であった。かろうじて挺身隊には「折り畳み銃」が渡されていたというものの、その性能はとてもア

メリカ軍の兵隊の装備には及ばなかった。そんな「銃」を抱えての「兵隊」の死は、「銃」に刻まれた菊の紋章の意味する尊大さに比して、あまりにもちっぽけな「兵隊」自身にはとうてい負いきれない「戦死」の責任の余剰の所在を告発し続けることになる<sup>62)</sup>。「銃」に帰属する外的・内的な強制の故に、「なかず」——動物的な「鳴かず」でもあれば人間的な「泣かず」でもあろう——、「咆えず」——犬のような小動物の「吠えず」ではないことに注意——に、鬱屈をためこんだままに「ひたすら 銃をもつ」他はなかった「兵隊」。そして未来を刈り取られて、無残にも「蒼」のままに死ななければならない「斬り込み隊」としての凄惨で、無情な「戦死」。竹内が、いよいよはっきりと自分の「戦死」のありうる形を具体的に理解していけばいくほど、彼の心にみちてくるのは、自己表現の詩人として、また映画人として、どう「こらえようもないさびしさ」であった。「原型」が残している竹内の「戦死」をめぐるいろいろな想念と鬱積に開かれているキーワード。「完成稿」は、「原型」の最初の三行を削除することで、竹内のさまざまな詩想へつながらキーワードを閉ざす結果になった。

第二に、「原型」の第二聯の初めの三行を欠落したために、「完成稿」の第二聯では、いきなり「白い箱にて 故国をながめる / 音もなく なにもなく」と始めることになってしまった。この二行目は、「原型」四行目では「音もなく なにもない 骨」となっていたから、「完成稿」では最後の「骨」という言葉を削った形になっている。この改変によって、「原型」では「なかず 咆えず ひたすら銃を持つ」っていた「兵隊」から「音もなく なにもない」、さらに自己表現力を奪われた「骨」への転化が進行していくことになるのに、「完成稿」ではその事態への注目が欠け、上に指摘したような鬱屈を抱えたものとして「骨」が存在するようになる来歴が消滅させられてしまうことになった。そして「原型」の五行目が「音もなく なにもない 骨」と名詞止めになっているのに、「完成稿」では、「音もなく なにもなく」と次の六行目の「帰ってはきましたけれど」に続ける形に直されている。こうなれば「故国」に帰った「骨」は、「ふるさとの風」や「こいびとの眼」についての生前の記憶も、「銃」を持たされての「死」の記憶もないいわば「骨」としての「骨」であることになってしまうのではないかと。こうなると、「骨」のいわば歴史的態様に関心する「原型」と「骨」の既定性にこだわっている「完成稿」との距離は無視しえないものとなってくる。この論点は、また後に第三聯にかかわってさらに掘り下げなければならぬ問題となる。

なおここで、竹内には、自分の運命をただ「玉砕」し「骨」になるものとしてだけ未来を限定し切ってしまうことができない向日的な性格がある、ということに注意しておきたい。先の『筑波日記』2の詩の後半では、「チカラノカギリ、コンカギリ」戦うことは「ソレハソレデヨイ」し、「ボクモノゾムノダガ」と述べた後、それでは「ワケモナク、カナシクナル」と付け加えている。この場合には、「ワケモナク、カナシクナル」のは、挺身斬り込み隊の「兵隊」の「戦死」がそうだというのではない。そのような状況の中にあまたの「兵隊」たちの生命を置き入れるより他に方途を知らない政治権力の貧困・無策が、「ワケモナク、カナシクナル」のである。そして竹内が、「兵隊」たちの生命の浪費に耽る「悪の豪華版」に対して、詩人の特権として提起し



うるオルターナティブがある。

白イキレイナ粉グスリガアッテ、  
ソレヨバラ撒クト、人ガ、ミンナタノシクナラナイモノカ

同じようなモチーフは、『伊勢文学』創刊号に掲載された三村鷹彦の詩「戦争」の結びにも出てくる。

私は静かに考へよう  
君たちの弾が 私を殺すかもしれない  
だが私は考へよう  
平和な世界を祈っているから<sup>63)</sup>

ここで「君たち」と呼びかけられているのは、アメリカ大統領のルーズベルトであり、イギリス首相のチャーチルである。敵のいわば頭目を目前にイメージしながら、そしてその敵の「弾」によって殺されることを予想しながら、なおもその運命を超える「平和な世界」の来ることを、そしてその将来を祈る——戦争のためのあらゆる強制装置がフル回転しており、「兵卒」の一員に組み込まれながら、なおそこにあって「平和」について考え続け、戦争が唯一の選択肢ではありえないという思いをつないで生きていくのは、たいへん勇気のいることである。しかし「平和」においてこそ人がはじめて生きることができるのだという三村の考え方は、竹内にも共通した前提であった。

こうして「原型」第二聯の「骨」の歴史的な態様への関心は、背後に「戦死」よりも生と愛を、「戦争」よりも「平和」を願う心を背景に持ち、その心と一体であった。生き抜いて、さしあたりはファンタジーや祈りという形においてであっても、非戦・平和の世界を構想しようとした精神的な伝統が、『伊勢文学』には底流していたのだ。

竹内の「骨のうたう」の「原型」の第二聯には、生きうる限界状況のもとで、なお生き抜こうとする竹内の模索と苦悩の痕跡が埋め込まれていた。初めの三行に出てくる「銃」や「戦争」という言葉は、「白イキレイナ粉グスリ」が発明されうる竹内の詩の世界では、「平和」がかえり、「ミンナガタノシク」なるもう一つの世界に反転していくベクトルをはらんだものとして使われていた。ひょっとすると軍人として「勲章」をいっぱいもらって名を残す生き方もありえただろうが、その生涯は「恋人」の「観音」様のような魅力からすると、たちまちに色あせてしまうだろう、という作品もある。平和ならば、古本屋になり、哲学の本を読む一生もありうると思えたし、また地方の小学校の教師としてつつましくかに子どもたちと日々を送る生き方もありえた。だが、もうすこし自分の詩の力を世に問うよい方法があるようにも考え直す。多分、いちばん生き甲斐があることは、パリへ行って映画監督としての成果を世に知らしめることなのだろう。だ

が、戦争の現実の壁はあまりにも厚く、時は夢多き竹内にはあまりにも苛酷であった。ありうべかりし生活の幾つかの形に対応しているのが、さまざまな「骨」の態様の変化なのであった。

このように、「原型」の第二聯には、「骨」の態様の変化を追いつつ、戦争とは別のもう一つの世界への通路を探ることのできる言葉が残されている。けれども「完成稿」には、何よりも「骨」のデリケートな変化に対する注意が欠けているし、生きる意欲と願望に反転していくベクトルを持った言葉の痕跡が消されてしまっている。

「原型」の第二聯に関連して、第三に指摘しておきたいことがある。「原型」の第二聯と「完成稿」のそれとを比べてみるとわかるように、「原型」の九行目の「骨を愛する人もなし」という言葉が、「完成稿」では「骨は骨 骨を愛する人もない」と、「骨は骨」——これ自体は竹内の言葉だが、すぐ後に見るように、その含意は単純ではない——を付け加えた形になっていることである。

いったいどうして「骨を愛する人もない」のだろうか？ それは、「骨」がたんなる「骨」であって、生きることを愛し、「蒼」の青春の記憶をいまだに留めた「兵隊」の「骨」であると考えられていないからである。だから「完成稿」は、「原型」の文脈に即して言えば、「骨は骨」という言葉を付け加えて、この「故国の人によそよそしさ」を条件づけている「骨」の「骨」としての形態と、つねに「故国の人」と共に生きたいと死ぬ瞬間まで願い続けてきた、「蒼」の青春に由来する「骨」の来歴との断絶をいっそう際立たせることになった。その反面「完成稿」は、「故国の人によそよそしさ」が、また「原型」の表現している「骨」の思いや来歴についての関心のなさにも起因していることを見失うことになった。

それに続く「原型」の十～十一行目は「完成稿」でもそのままになっているが、「原型」がそれまでに前提としてきている詩想の脈絡を「完成稿」が追えていないために、第二聯のそれ以後の屈折した表現に迫ることができなくなっていく。

第四の問題点として、「原型」の十二行目の「なれど 骨は骨 骨は聞きたかった」のうち、「骨は骨」という言葉が、上の場合とは逆に、「完成稿」では削られている。「骨は骨」という言葉は、「原型」においては、十行目の「骨は骨として 勲章をもらい」、さらには十六行目の「骨は骨として崇められ」の「骨は骨」と対比すればわかるように、「骨」の含意の二重性にかかわる表現として、ここでは絶対に欠くことのできない言葉である。「勲章をもらい」、「国」と「大君」によって「崇められ」る「骨」とは、その人間的な来歴を捨象された、その意味で「戦死」の事実だけにしかかわって評価されるたんなる形態としての「骨」である。「完成稿」で上に付け加えられていた「骨は骨」もこの場合に入る。けれども、竹内にとっての「骨は骨」というときの「骨」には、その逆に人間的来歴をしこたま背負い込み、「国」と「大君」のために「戦死」したことにまったく納得していない側、ホンネの立場の「骨」もあるのである。だから国民の側からの「絶大な愛情のひびきを 聞きたかった」と苦悶し、したがって「それはなかった」とわかったとき、「骨」の悲しみはいやまさっていくほかないのである。「なれど 骨は骨 骨は聞きたかった」と念を押して「骨」という言葉をくどく繰り返しているのは、竹内にとっての本当の



「骨」とは、この後者の「骨」のことであり、たんなる形態として「國」や「大君」の賞賛や崇敬を受ける側面、立場の「骨」のことではないということを言いたいからである。問題は、いわば「骨」の党派性にかかわっていたのである。残念ながら、「原型」十二行目の「骨は骨」という言葉を削った「完成稿」は、この「骨」の党派性についてあまりにも無関心ではなかったのだろうか？

第五には、「原型」の十五行目の「がらがらどんどん事務と常識が流れていた」についても、「完成稿」では、「がらがらどん」が「がらがらどん」と「と」を加えて、ひとつ間接的な表現に変えられ、「ながれていた」という終止形の文が、「流れ」と連用形に直してある。「原型」がそうになっているのは、次の行の「骨は骨として崇められた」の終止形に対応していて、「骨」の党派性のかかわる分岐を自立的なものとして表現しているのであって、「完成稿」のように、両者をあいまいに合流しようとするところからは遠い。こうして「骨」の抛るべき側には、「骨を愛する人」もなかったがゆえに、ついに「愛情」のなかでふたたび甦ることもなく、やがてはその悲嘆のあまり、空しく「骨はチンチン音を立てて粉」になっていく他はなかったのである。にもかかわらず「完成稿」は、「骨」の「党派性」をはっきりさせて、第二聯の終わりを引き締めている二行、「骨は骨として崇められた」と「骨はチンチン音を立てて粉になった」を削除している。

さて、「原型」の第二聯では、こうして行を追って跡づければはっきりするように、生身のままだに「戦死」した「兵士」が「骨」となり、「木箱」に納まって帰国し、天皇・国家の側と恋人・故郷の側とから二重に疎外されて、ついには「チンチン」音を立てて粉になっていく歴史が見通されている。かつて小田実は、特攻機を飛び立つところまでの描写にとどめて、その実際的な効果のない悲慘な体当たりの現場まで追跡することのない戦記映画一般の扱い方に疑問を提起したことがあったが、そのひそみに倣えば、竹内は「兵隊」の「戦死」の「あわれ」さをたんに「戦死」の時点で止めることなく、その「骨」の二つの党派性をきっちり腑分けしながら、それぞれの持つ意味をとことん国家と社会のなかでの処遇にまで追い詰めようとしている。このような形での「戦死」の論議はかつてなかったし、その点で竹内のこの視点は貴重である。しかし残念ながら「完成稿」は、この決定的な竹内の詩のユニークなモチーフをつかみきれず、「骨」の生成・変化の道筋を消し、その意味の変化や党派性を逸するような削除を重ねる結果になってしまった。

結局のところ問題の根本は、「苔」という意味不明の言葉を回避することに発しているように思える。そしてその文字が本来は「苔」ではなかったという私の推測を前提にした言い分なのだけれども、「苔」という意味不明の言葉に対する検討を回避したことは、たんなる一字の意味を不明のままに放置したということとどまらず、「骨のうたう」という詩そのものの重要な詩想と文脈の変化とにけっして小さくはない結果を引き起こすことになってしまったと言えそうである。

八

第三聯は、「原型」と「完成稿」との違いが最も大きいところである。この部分は、どちらもあまり長くないので、両者を直接に対比して見てみることにしよう。

「原型」	「完成稿」
ああ 戦場やあわれ	ああ 戦死やあわれ
故国の風は 骨を吹きとばした	兵隊の死ぬるや あわれ
故国は発展にいそがしかった	こらえきれないさびしさや
女は 化粧にいそがしかった	国のため
なんにもないところで	大君のため
骨はなんにもなしになった	死んでしまうや
	その心や

こうしてみると、ただちにいくつかのことに気づく。

第一に、一行目では、「原型」の「戦場」が「完成稿」では「戦死」となっており、二行目以下はすべて削除されている。つまり「原型」の第三聯は、「完成稿」では、まったく削除されている、といってもよいわけである。

だが、「原型」は、そもそも何をうたおうとしているのだろうか？

「原型」の一行目が「戦場」としていることにこだわってみると、この言葉が喚起しようとしているのは、何よりも「骨」の生成の原点である「戦場」のことであろう。「戦場」にあっては、「骨」はまだ「骨」ではなく、若桜の「荅」のイメージのままの若者の「兵隊」であり、「兵隊」の脳裏から消えたイメージには「ふるさとの風」があり、「こいびとの眼」があったし、死の運命を余儀なくした「大君」や「国」に面と向かって言問いたい姿・形が思い浮かべられていた。だが「骨」には自分が死ぬまで生きる支えとしてきたものへの愛をわかってもらうこともなかったし、死の理不尽さを責任ある当事者に面詰する手だても欠けていた。これが一行目の「あわれ」さの内容になっている。

これにたいして「完成稿」では、一行目は、第一聯の最初の行に詠嘆の「ああ」を付け加えてはいるが、その単純な繰り返しになっていて、繰り返しはそのまままた二行目にまで及んでいる。「完成稿」の第三聯の視点は、その第一聯のそのままなのである。

「原型」では、一行目の「戦場」から、二行目では「故国の風」へと視点が移っている。「故国の風」は、「骨」になつかしい「ふるさとの風」とは違うのだ。「故国」は、「國」や「大君」を含めたものだから、形の上では「骨」を「崇め」ているものの、「故国」は、「兵隊」がかつて愛してやまなかった「ふるさとの風」や「こいびとの眼」から遠く離れたものとなり、人知れぬ異

境に望みもしない敵と戦って果てた「骨」の訴える「戦死」の理不尽さ・無念さ、孤独・絶望、夢・希望に耳を貸すことはますますなくなっていく。そうして「故国」から吹き寄せる現実主義と忘却の「風」は、いまやみずからを苛むことで「粉」になってしまった「骨」の存在を、吹き飛ばすまでになった。「戦場」で倒れた「蒼」の「兵隊」が、かつてみずからの生存の理由として信じてきた「故国」とそれにつながるものすべてが、「骨」のアイデンティティを消滅させるまでに変わってしまう。「原型」の二行目がうたっているのは、こうした内容なのだが、「完成稿」では、この決定的な意味を背負った二行目は削除されてしまっている。

ここで問題なのは、竹内の「骨のうたう」が、徹底的にこだわろうとしている死後についての時間意識、将来へ向けての状況変化感覚といったものである。竹内は、中学校時代の漫画誌『ばんち』に「奇談 箱の中の地獄」（1937年暮れ）という創作を載せたことがあった。市街化のために墓地を改修中、改葬のために掘り出された棺の内側に、埋葬者が生存していたことを示す記録が残されていた、というストーリーである。現在ならば脳死問題に関わる文脈で取りあげられそうな話であるが、この死んでも死に切れぬ魂の存在というテーマは、竹内の「骨のうたう」のなかの「白木の箱」の「骨」への持続的な関心というかたちでそのまま引き継がれていく。またやはり中学校時代のこと、竹内は、人間が死んで肉体をなくすと五感の「道具」を奪われることになるが、それに代わって「X感、Y感、Z感」等々を得て、別の世界・宇宙の展開を見ることができるといふ<sup>64)</sup>、という興味深い話題を取りあげている。このような死後の状況感覚の存在を承認し、X感等々と呼ぶかどうかについては論議のあることだが、竹内の詩の世界にあっては、その超感覚によって、銃を持つ「兵隊」から白木の箱の「骨」へ、そして帰国した「骨」から「故国の風」による「粉」化へと、時間の経過とともに進む「兵隊」の存在の変化とその意味とを問いつける。そしてこの視線は、この第三聯においても最後まで持続していて、けっして放棄されることはない。

じじつ、続く三行目と四行目はそのことを示している。ここで言われていることは、表面的には、すでに第二聯で指摘されていた「故国」の「事務や常識」が「大切」にされ、「がらがらどんどん」と「流れ」ていくといった事態が、もはや「風」に吹きとばされた「骨」にはおかまいなく「発展」し続ける。そして内向きの「女のみだしなみ」は、むしろ外向きの「化粧」へと重点を移すようになった。ここの二行は、けっして第二聯のものの繰り返しではないのである。

「原型」の最後の五～六行目は、「故国」と「骨」との乖離の進行のゆきつくところをうたう。「なんにもないところで」「骨は なんにもなしになった」という。きわめて無造作な、また淡々としたともとれるこのような最終聯のむすび方は、いかにも明快で、竹内的である。けれども、実は、この二行の解釈は、それ自体としてもどうも一義的なものではなく、取りようによっては、「骨のうたう」の詩そのものの理解にもさまざまな分岐を呼びそうに思える。

いったい五行目の「なんにもないところ」とは、どういう意味なのだろうか？ 私の上記の解釈の線で行けば、「骨」の居場所がないということ、それが本来アイデンティティの拠り所としてきた「ふるさと」や「こいびと」につながる「祖国」には「骨」を受け入れる場所がまったく

失なわれてしまった、ということになるう。

「骨」の帰国した日本では、そして事実としての「戦後」の日本ではということになるが、たしかに「故国」はますます「発展」し、人々の関心は、「女」の「化粧」に象徴されるように、もっぱら個人的な生活の享受に集中するようになり、戦争体験と歴史意識の風化はかつてなく進んでいる。かつての「戦争」で「ひょん」と「戦死」した「兵隊」たちが、「國」・「大君」や「ふるさと」・「こいびと」の関係をめぐって、あるいは「戦死」の意味や価値をめぐって、深刻な内面的分裂・葛藤に襲われたことに思いをいたす人は極度に少なくなっている。「骨」からすれば、「戦後」の「祖国」の発展は、たしかに「日本が見えない」という事態を出現させているのである。

もちろんその一方では、「兵隊」を「戦場」に駆り出し、「銃」を持たせて「戦死」させた「大君」とその「国」につながる「祖国」の側は、これまた「戦後」の日本の事実として、「骨」に「勲章」を与え、戦前と同じく靖国神社に（それもA級戦犯ととともに）合祀して「高く崇め」、歴代の内閣閣僚の「礼拝」を捧げているから、ある意味では「骨」の「ほまれ」も高い。だがその者たちが、「崇め」、「ほまれ」を讃えるのは、みずからに引き受けなければならない「戦死」に対する責任をひた隠し、免れるための偽善ではないのか？　そしてそのような偽善によって、「骨」からすれば、切実に「愛情」をもって理解して欲しい者たちにつながる「祖国」は、かえって「戦死」に対する無知・無関心の度をたかめ、「愛」と「美」と「平和」に憧れ続けた「骨」を時間の風化のままに委ねる冷たい仕打ちを重ねていくことにもなる。すくなくとも竹内のうたった「骨」は、そのような「大君」やその「国」につながる「祖国」によって「戦死」させられしたものの、けっしてそのようなものどものために「戦死」したのではなかったのだから、いまや「骨」は二重に引き裂かれた「祖国」の現実を前にして、まったく行き所がないのである。「なんにもないところ」とは、いわばこのような「墓場なき死者」という意味だ、といえる。

もっともそのさいに、「なんにもないところ」を現実的な存在を否定された場所と取り、「骨」には「無可有郷（むかうのさと）」たるユートピアだけが残されていると考えることもできるのではないかと。竹内には、「戦争」で殺しあう「戦場」よりも、「人ガ ミンナタノシクナル」ようなユートピアの世界のほうが、はるかに生きがいをつけるに値するものだったことは、確かだからだ。その場合には、そのユートピアは、竹内だけのもので、それが次の世代の形成に力を貸すようには思えなかったであろう。だから「骨」としての竹内の居場所は、「なんにもないところ」なのである。竹内が書き残したもののの中に、自分の子どもができて、「哲学」好きの自分の素質は受け継がれず、子どもが「玉突き」が好きになるので、「一切無常」を感じつつ死ぬ、という結びになるやや長い詩<sup>65)</sup>がある。いくらかは自分が親の心子知らずであった過去にたいする自省をもこめたこの世代の断絶状況のなかに、先行世代が命をかけて守り育ててきたユートピアが、「なんにもないところ」に位置づけられる歴史のある形がありうるわけである。

では、「原型」の最後の行の「骨は なんにもなしになった」とはどういうことなのだろうか？

それは、「骨」に象徴されるような、「戦場」につながる社会的・制度的・人間的な記憶が、物

質的にも、また精神的にもすべて失われてしまうということだ。竹内のユートピアの記憶も消滅してしまうのであり、いまいちど「骨」は「死に直し」をよぎなくされるということになる。一度目は事実的に、二度目は文化的に。あるいは一度目は悲劇として、そして二度目はもはや喜劇にも値しない、いわば時効によって。けれどもそのことは、またぞろ、「記憶の暗殺者たち」による恣意的な記憶の現実化が企まれ、ふたたび——なおも未来の戦争についても「戦後」を人類が語りうるし、「前線」と「銃後」との区別がありうると仮定してたうえでのふたたびなのだが——「戦場」から「骨」への「あわれ」な歴史が開始されるだろう、ということではないのだろうか。「骨」は無に帰してしまうことで、「骨」の悲しみは極まる。と同時に、日本の未来にはあらたに「戦場」における「骨」の誕生の時がはじまるのである。

こうして、結局のところ、「骨のうたう」の「原型」は、その終聯にいたって、それが日本の未来予測と日本の国民そのものの「戦後責任」を問う、ある種の預言の詩としての性格をはっきりと獲得するのである。

これに対して、「完成稿」の場合はどうか？ 最終聯の一行目は、端的に「戦死」を悼むことで終わっている。「原型」が「戦場」に立ち返って、最初から「戦死」に対する時間意識を際立たせるのに対して、同じく「戦死」を問題にしながら、ひたすらに戦死者の心情のうちに回帰し、そこに低回したままにとどまっている。「完成稿」と「原型」とに見られるこの時間の志向性の有無の違いは、二行目以下でいっそう大きくなっていく。

「完成稿」は、「原型」の第二聯の二行目で削除した「こらえきれないさびしさ」を、三行目に復活させているものの、四～七行目は第一聯の終わりの部分をそのまま繰り返している。つまり、「骨」の「死んでしまう」心のさびしさを、いまいちど強調することで終わっていることになる。「完成稿」における最終聯の作詩のスタンスは、ひたすらに懐古的であり、詠嘆的であり続けようとする。「原型」のそれが、つねに未来へ向かい、探求的であることをあくまでも止めていないのとは、あまりにも対照的である。

「原型」の第三聯こそ、竹内の「骨のうたう」の発展的な詩想を集約的に表現した、決定的な部分であった。だが「完成稿」では、その決定的なモチーフを理解できないままにすべてを書き換え、詩想を押し戻してしまった。

編者によって指摘されているように、おそらくは「完成稿」は竹内自身の手になるものではあるまい。詩に向かうスタンスが質的に違うのである。たしかに「完成稿」は、「兵隊」の「戦死」の「あわれ」さを強調し、「戦後」の「故国」の発展の意味を問い返していることでは、「原型」のもつ可能性のひとつを引き出し、展開したことは疑いない。けれども、いま新全集が出されて、竹内の「骨のうたう」への関心がこれまで以上の資料を前提にして、21世紀の歴史的な文脈の中での読みのなかに広く解き放たれようとしている時、はたして「原型」に対する「完成稿」という位置づけを与えておいたままでよいのだろうか？ あらためて竹内自身の「原型」の魅力と開かれた豊かな可能性から出発し、それ自体を徹底的に読みなおし、読み込んでみる必要があるように思える。「原型」は、「完成稿」にとってのある種の「未定稿」でも「草稿」で



もないのではないか？ 「原型」は、そもそも、それ以外の何かの詩にとっての「原型」であるのではなく、他に置き換えがたい独自の、そして卓抜な価値を持っている。これが、「骨のうたう」の「原型」をめぐるやや立ち入った論議をおこなったこの小論の結論である。

## 九

ことの発端は、「原型」のテキストにある「苔」という言葉では、それを含む第二聯の初めの部分が解釈不可能になってしまうのではないか、というごく単純な疑問にあった。そしてその結果は、「原型」と「完成稿」との関係如何という思いもかけない論議にまで立ち入ることになってしまった。

この論議を進めるなかで、あらためて竹内の「骨のうたう」の預言的な性格にしばしば思いを致さないではおれなかった。かつて原民喜は、大学時代から始まる作句の場合に、俳号を「杞憂」と称していたが、いまになってみると、それは天地が崩れる原爆体験をすでに預言した作句をいくつも残した詩人の俳号として、いかにもふさわしいものであった<sup>66)</sup>。原は、戦争末期、雪崩を打ったように戦争の賛美・謳歌に走った圧倒的多数の作家・歌人たちとは異なって、戦争に距離をおいた数少ない作家であった<sup>67)</sup>。その点では竹内は、1905年生まれの前より後も、16歳若く、いちばん戦死者を多く出した世代に属していたから、当時の多くの若者たちと同じように自分の「戦死」の予感をさまざまな表現にして残しながら生きることになった。そしてまた竹内の文学は、なお未成熟な要素や可能性をいっぱい残してはいるものの、当時の文壇・詩壇の戦争への狂騒からは距離をおいていた点で、原に似ている。ただ原の詩想が透明な静謐を湛えたものであったのに対して、竹内の詩想は明晰で晴れやかであった。そして原の場合、朝鮮戦争に終末論的な原爆戦を予感して、みずからの未来を断ったのに対して、竹内には、「骨のうたう」（「原型」）に典型的に見られるように、「戦死」の後に「骨」の際会するであろう未来の歴史的体験を預言し、死ぬに死にきれない思いに駆られ続けながら、死地に追いやられたところに、ユニークさがあった。

竹内の「戦死」の予感、あるいは彼流の言い方では「X感」にしたがって「骨」が無に帰してしまう悲劇的結末をうたったにしては、「骨のうたう」の「原型」で「骨」がたどる転変は軽やかで、かりに「戦後責任」というきわめて重い課題を「戦後」を生きているわれわれに提起しているにしては、静かで、また屈託がないといえるほどにも、どこか明るい。「戦死」をうたいながら、「死んで帰れ」と励ましたり、「国の大義に殉ずる」任務を絶対化するところはいささかもないし、まして「九段の桜」と咲けといった国民歌謡的なスローガンに回収されるような皇国史観のニヒリズムもない。どこか、「戦中」から「戦後」に突き抜けて訴えてくるところがある。竹内のこの詩の同時代感とでも云ったらいいのだろうか。

それは、なんといってもこの「骨のうたう」が、あの戦争で死にたくはない、生きてもっともっとやることがあるという思いをたっぷり背負い込んで書かれた詩であるからではないだろうか？

「にぶはしりせん」とうたった竹内のユーモア感覚がその思いを見事に伝えてくれている。あの「戦中」の日本の軍人・市民数百万人の犠牲者・戦死者、日本の侵略戦争によってつくり出された二〇〇〇万人を越すアジア連合国の犠牲者・戦死者の死の意味を汲み取る根本的な視点は、決してあのような戦争では死にたくはなかった、殺されたくはなかった、殺してはならなかったという死者すべての思いを取り返すことではないだろうか？ そして竹内の「骨のうたう」には、その重い思いが、「戦死」のあわれさを通して、率直にうたわれているところに、半世紀を越えてかえっていっそう同時代感を生み出す秘密があるのではないか<sup>68)</sup>？

あれほどにも痛切な戦争の死者たちの死の意味を、靖国神社への合祀に還元して、靖国参拝があたかも当然の国家的な責務であると考えて怪しまない政治家たち、核武装の合憲性を言いはじめた内閣閣僚。そして経済発展のなかで、いつしか戦争の苦難と加害の責任のことにも、新しい戦争の危険にも次第にオンチになり、ひたすら新しい「化粧」にだけ忙しく気づかっているように見える日本国民のある部分！ 竹内の「骨」が可視化したのは、こうした日本の「戦後」の一つの断面であった。竹内の「骨」は、こうして「なんにもなしになった」としても、そのことは決して「骨」が安らかに眠ったと言うことではない。むしろその逆であり、「骨」からすれば、このような日本の「戦後」の現在の方が、歴史的な虚構であり、「見えない」ものと思えるのである。

だから竹内の「骨のうたう」の「完成稿」がそうであるように、竹内の「原型」の主意は、一義的に「戦死」の「あわれ」さばかりを主張しているわけではないだろう。むしろそのように主張していると思わせるのは、竹内のアイロニーであって、そうあって欲しくはないという願望の屈折した表現として理解するべきであろう。「戦死」の「あわれ」さの裏側に、そうありたくはないし、もっといろいろの青春の生き方の選択があっていいのだという、じつに熱い思いがいっぱい込められているのである。

「戦中」に、「聖戦」に対する文学的な「翼賛」に務めた「コギト」派のなかに、トルストイの『戦争と平和』の評論を代表作として残して、竹内の「戦死」の一月後の1945（昭和20）年5月、ルソン島はマニラ郊外の山地で「戦死」した「兵隊」がいた。彼は、アウステルリッツにおけるナポレオン軍との戦いで瀕死の重傷を負ったロシアのアンドリュー侯爵が、戦場の上空にひろがる「青い空」を見て意識を失うという、有名な場面を取りあげている。「多くの人たちが死んだ。馬も殺された。が高い空は依然悠々としている。いまや自分が死ぬ。個人的な死というものに対し最も切実なこの自分が死ぬ」、「が別に世界は変わらぬ、明日も今夜と同じように、風は草を鳴らし、暗闇がここの何もかもつつむだろう」。奇跡的に生き返ったアンドリューは、「新しい生活」をはじめたように思った。だが変わったのは「環境」だけで、それを「新しい生活」と思い込んだだけのことで、自然と同じく、自分たち自身は少しも変わらず、懶惰なままの生活を続けるのであった<sup>69)</sup>——トルストイは、すでに早く19世紀の60年代末、ヨーロッパに大動乱を巻き起こしたナポレオン戦争（1812年）にかかわって、このような疑問を提出していた、というのである。竹内は、第二次世界大戦のさなか、「骨のうたう」の「原型」で、「戦争」があり「戦死」が

あっても、「故国」も「事務」も「こいびと」も、いずれもそれぞれ別な意味で従来の行き方を変えることにはならないのではないか、という疑問を20世紀半ばに提出した。竹内の疑問は、またトルストイの提起した歴史的な疑問を受け、それを繰り返したものでもあった。このトルストイが提出した疑問の重要性を指摘した論者は、44年6月に教育召集を受け、その答えを書ききることのないまま「戦死」した。もっとも竹内が変わらない生活に大きな疑問をもっていたのに対して、この論者の問題の受け止め方には、変わらぬ懶惰な生活への無力感が底流していた。この時期、『コギト』によった日本浪漫派の主流は、京都大学の西谷啓治・高山岩男などの「世界史」学派とともに、日本思想による「近代の超克」論の宣揚に血道を上げていたことを思えば、無理からぬものがあった。『コギト』に拠った日本浪漫派が死に急ぐための頌歌をひたすら奏でるなかに、こうした隠れた真剣な生き方の模索もあったのだが、それが稔りをもたらす条件は日本浪漫派の内部にも、またその周囲にもすでにまったくなくなっていた<sup>70)</sup>。竹内は、当時の時流に乗った日本浪漫派を含めて、あらゆる既成の文壇から影響を受けたことはなかったが、それだけにまた曇りのないみずからの眼で近代の戦争の歴史がはらむ大きな疑問をまっすぐに読みとることができたのであった。

こうして、竹内の「骨のうたう」は、はじまったばかりのこの21世紀においては、いかなる意味での「戦後」の「新しい生活」をはじめることができるのか、というトルストイ以来の大きな問いかけのまえにわれわれを立たせる。「新しい生活」は、戦争の世紀であった20世紀においてのものとは異なっていなければならないし、ましてやナポレオン戦争の19世紀においてのものとも、さらに異なったものでなければならないだろう。いまこそ「骨」をして安んじしめよ！  
(2002/7/29)

# 注

- 1) 新全集、16巻<sup>57</sup>。『骨のうたう』に二つの異型があることは、すでに桑島『純白の花』にも指摘されている(28巻<sup>58</sup>)。
- 2) 「筆禍事件」については、同級生の回想などから、学校側の措置によって竹内が自分で発行していた回覧漫画誌『マンガ』を一年間休刊させられたとされてきた。しかし小林『恋人の眼や』によると、その措置は、教師との合議はあったものの、直接に父親から言い渡されたい(57巻<sup>59</sup>)。ちなみに、竹内の学校の成績は、一年の時の「中の上」から、4年には急下降し、下から9番目、最終学年の5年には下から6番目となり、教練は、3年、4年と落第点の50点、体操は4年まで50点代、5年で教練・体操ともにちょうど60点の合格点であった。ただし幾何だけは、たとえば2年時91点、平均点は60点代だから抜群の成績を見せている(68巻<sup>60</sup>)。
- 3) ある映画史の研究者は、わが国における映画の近代的隆盛を準備した昭和初期を、次のように概観している。

「無声映画の黄金期を示した大正一三年頃から、日本トーキーの定着した昭和一二年頃までを、便宜上映画の中世期として、一区切をつけて考えてみたい。日本は第一次世界大戦後の好景気による民衆娯楽の好況により映画常設館は各地に続出し、松竹はじめ映画の製作興行に乗り出すものまた相次ぎ、海外映画の技術的発達の入取れと、大正大震災後に起こった世相一変の風潮に援けられて、映画娯楽はいちじろしい繁栄を見せた。昭和初頭の類廃性や、剣戟映画の主流となったデスペレートな虚無性



なども、映画は片っぱしから吸収消化し、飽くなき旺盛さをもって時代と貪婪に対決した。そこには、新しく伸びて行く映画芸術あるいは映画産業の若さと活気があった。

その一方で日本の社会における映画の地位は、明治時代の見世物的存在とあまり変ることなく、その芸術的立場が、あらゆる既成芸術の下位に見くびられ、既成芸術家からは、芸術としての価値すら顧みられず、そういう偏見と圧迫の中であって、映画の社会性や芸術性を敏感に感得し、その将来性を確信した十代、二十代の青少年たちの中には、この時代から、映画プロパーの世界に“一生を賭ける”情熱を持って、あるいは映画製作に、あるいは映画評論に、孜々として精進を怠らなかつた。(田中純一郎『日本映画発達史』中公文庫、1975、376-378頁)

竹内が、ここで言われている「十代、二十代の青少年」の一人に属していたことはいうまでもない。

- 4) 竹内は、校則の映画禁止規則を犯して映画を見ていた(たとえば手作りのマンガ雑誌に「映画のページ」のコラムをつくり、「大地」などの名を挙げている。もっともこの映画が、1937年、日本が蘆溝橋事件によって「日中戦争」を本格化し、「中国政府を相手にせず」と傲慢にうそぶいている年に作られたこと、パウル・バックの原作を生かして、中国農民の苦悩、逞しさ、堅実さを描こうとしたことなど、この映画がもっていた価値を竹内がどこまで認識したかは、わからない)。またさまざまな口実で地元を離れ、その機会を捉えては映画を見ている。たとえば38年には、焼ヶ岳へ行く口実で、名古屋・松本で「未完成交響楽」「モダンタイムス」などをハシゴしているし、その一ヶ月ほど後には、榎原神宮の奉仕隊に出てから大阪にまわり、「舞踏会の手帖」に感動している(新全集、405頁、406頁、409頁など)。
- 5) 小津は東京で生まれ、10歳から父の実家がある宇治山田市に帰って、小学校の高学年を終え、1916年に竹内の23年上の先輩として宇治山田中学を卒業した。小津は、松坂で尾上松之助の映画を見てから病みつきになり、名古屋の御園座までイタリア映画「クオワディス」や「ポンペイ最後の日」を観に行ったりしている。中学校の勉強はあまり真面目にやらなかった。神戸高等商業学校を受験した際にも、神戸で「ゼンダ城の虜」を見ているが、上級学校にはいかなかった(ドナルド・リーチ/山本喜久男訳『小津安二郎の美学』教養文庫、1993、316頁)。このような子どもの時からの映画好きの傾向は、竹内にも共通している。小津は、「生まれてはみたけれど」(32年)、「浮草物語」(34年)、「戸田家の兄弟」(41年)などの傑作を撮った後、日中戦争時には中国に、戦争末期にはシンガポールに動員されている。中学時代の竹内は友人に郷土の映画人小津への憧れを洩らすことがあった(小林『恋人の眼や』、78頁)というが、竹内の記録には小津の名も彼が監督した映画名も出てこない。
- 6) 小林『恋人の眼や』、84頁、89頁。
- 7) すでに外国映画は輸入禁止になっていたが、折に触れて名作を再映する場があった。竹内は、大学へ入ってからは、フランス映画をよく見たようで、ルネ・クレールの「巴里祭」「巴里の屋根の下」などを挙げ、親友とともに、戦争が終わったらパリへ行くのだ、と同人誌に書き残している(新全集、166頁)。
- 8) 竹内は、42年6月9日付けの姉宛の手紙で、大映京都に助監督の口があったが、「兵隊前」であるためにダメになった、と書いている。また伊丹万作に見込まれていて、入隊中に何度も手紙をもらっている。竹内は、99年4月17日の日記に、伊丹の手紙にあった句を再録している。「寒雷や天地のめぐり小やみなし / 北吹けば紅の花に雲降り / 春三月は冬より寒し / 菜の花や島を廻れば十七里」(新全集、344頁)。最初と最後が俳句、中のものが短歌で、明らかにいずれも戦争の終末の遠からざるを暗示して、竹内の生きる勇気を励ましていた。竹内に対する伊丹の期待の表れであろうが、竹内には、暗夜に一筋の光明を見る思いがしたのではなかろうか？
- 9) 新全集、17-18頁。
- 10) 竹内が筑波で訓練中に記した日記の中に、「ぼくのねがいは / 戦争に行くこと」、「ぼくが見て、ぼくの手で、戦争をかきたい」、「そんなめなら、銃身の重みが、ケイ骨を砕くまで歩みもしようし、死ぬることさえ、いといはせぬ」(新全集、375頁)と、記されている。
- 11) 同上、20-22頁。

- 12) 石川達三は、『中央公論』（1938年2月号）に掲載した「生きている兵隊」が「新聞紙法違反」に問われたとき、公判で自分の意見を述べた。「国民は出征兵士を神様の様に思い、わが軍が占領した土地にはたちまちにして楽土が建設され、支那民衆もこれに協力しているが如く考えているが、戦争とは左様な長閑なものではなく、戦争というものの真実を国民に知らせること」（石川達三『生きている兵隊』中公文庫、207頁）が、真に必要な、と。そのために「生きている兵隊」というタイトルが選ばれた。天皇のためにたたかう者を「神」に仕立てることは、生きた兵士の行う現実の戦争を頭からフィクションに作り替えることであった。
- 13) 同上、23-27頁。
- 14) 旧全集1、214-215頁。なお「日本が見えない」が大学時の教科書に書かれていたことは、モチーフの連続する「原型」の成立が竹内の入営の直前であったことのいまひとつの証拠であろう。
- 15) 新全集101-103頁、旧全集1、212-214頁。
- 16) 桑島『純白の花』、30頁。
- 17) 「秋岸清涼居士」の詩の第一聯は、次の通り。終わりの三行が第二聯以下にもリフレインとなって繰り返される。「消えていったのは、／あれはあやめの花ぢやるか？／いいいいい、消えていったは、／あれはなんとかいふ花の紫の苔みであつたぢやろ／冬の来る夜に、省線の／遠音とともに消えていったは／あれはなんとかいふ花の紫の苔みであつたぢやろ」『中原中也全集』第一巻、創元社、1951年、194-196頁。大岡昇平編『中原中也詩集』岩波文庫、375-380頁。竹内は、大学時代のノートに、詩人は奇をてらうとして、「ランプがコンペイ糖になって、蟻が月を見て飢え死にをしました」などを書くものだ（新全集、466頁）としているが、これは中原中也のよく知られた詩「春の日の夕暮れ」にある「トタンがセンペイ食べて」といった表現のもじりである。
- 18) 写真になった竹内の字を見ると分かるが、心に浮かんでくる言葉を太急ぎで文字にするために、あちらこちらに誤字や略字がある。新全集の写真のなかにある文章を見ると、「国旗と校旗」と続けて書いてあるのだが、ともに「旗」の字が怪しくて、ツクリの方が「其」となっているし、とくに「國旗」（当時は「くに」は旧字で教えられた）では「國」が「口」と略記された上、「旗」の字のヘンとツクリとが逆に直してある（「軍艦見学の記事」）。といってもこれはわざとそうしたと推測できないわけではない。軍艦長門を見学した後で、担任の先生から「拝艦の感想」を聞かれて、「忘れました」といって誤魔化した時の文章なのである（新全集、619頁）。
- 19) 新全集、107頁、旧全集1、87頁。
- 20) 1943（昭和十八）年に入ると「航空決戦」が叫ばれ、飛行機搭乗士官を急増する必要に迫られた海軍は、飛行科予備士官制度によって、旧制大学・高専の卒業生の志願者を大量に受け入れた。34年に制度が発足した当初の第1期生はわずか6名、42年の第16期生までの総数が507名であったのに、43年の第13期生は一挙に5,199名になり、12月には「学徒出陣」による現役入隊者から5,520名が第14期生・第1期予備生に加わった。その後44年の第15期生・第2期予備生3,638名、敗戦の45年の第16期生・予備生285名と続き、発足以来の総数15,149名に達する。そのうち戦死者は2,485名、うち第1～12期生が268名で戦死者率は56%、第13期生の戦死者は1,617名で、戦死者率では31%だが、絶対数では突出する。第14期生・第1期予備生の戦死者は576名で戦死者率10%、第15期生が戦死者25名、戦死者率0.7%と数字の上では急減するが、それでも最後まで戦死者が出続けている事実注目したい（白鷗遺族会編『増補版雲ながる果てに河出書房新社、1995年、10頁。他に巻末の戦没者名簿を参考にした）。この大量の飛行機搭乗要員の存在は、特攻隊の体当たり攻撃では艦船に対してあまり効果がないことをよく知っていた海軍が、正規任用の海軍将校（海軍士官学校出身）を避けて、「消耗品」と考えられていた予科学生・予備生たちを主として特攻隊に注ぎ込んだという非難されるべき戦術を生むことになった（高木俊郎『陸軍特別攻撃隊』3、文春文庫、1986年、388頁）。竹内が入隊したのは陸軍であったが、入隊の年代から見れば、上で云われている第13期生に相当している。小林察も、竹内の旧制宇治山田中学校第40期（1939年3月）卒業の同級生の物故者数が、その前後の卒業生のそれよりも格段に高いことから戦死の影響の大きさを推測している（小林『恋人の眼や』、270頁）

が、そのなかには予備生として「特攻死」した者もかなりいたのではなかろうか。

- 21) 高木惣吉『太平洋海戦史』岩波新書、1959年、59頁。
- 22) 桑島、上掲書、31頁。
- 23) 新全集、439-440頁。
- 24) 新全集、393頁。
- 25) フィリッピン戦線の経緯については、林二郎『太平洋戦争陸戦史』岩波新書、1951年、「第一章フィリッピンにおける決戦の失敗」を参照。
- 26) すでに「大本営は、12月7日の米軍オルモック湾上陸以前に、レイテ戦に見切り」をつけており、ルソン島の作戦についても、「海軍は、山下【奉文】將軍のマニラ市放棄に対して、旧市内に籠城し、第四航空軍司令官富永【恭次】中將は独断で台湾に去った」というように、統一性を喪失していた(大岡昇平『レイテ戦記』中公文庫、下巻、70頁、71頁)。とくに富永司令官は、東条英機大將の第一の腹心であり、その卑劣な逃亡は、その下にいた隈部正実参謀長など幕僚の共謀によったものだった(たとえば高木俊郎『陸軍特別攻撃隊』同上書、「人間無視の思想」、「あとがき」などの項を参照)。
- 27) 44年4月24日、2月27日、6月12日の『筑波日記』を参照(新全集、347、377、305頁)。
- 28) 「近衛上奏文」、『外交資料 近代日本の膨張と侵略』新日本出版社、1997年、381-383頁参照。
- 29) 小林『恋人の眼』、「あとがき」。
- 30) 竹内のフィリッピン派遣の経過については、同上、253-254頁。
- 31) 桑島、上掲書、65-66頁。
- 32) 穴倉公郎「薬剤将校のフィリッピン戦記」、『学徒出陣』日本の戦史別巻、毎日新聞社、1981年、127頁。
- 33) 大岡昇平は、戦後間もなくの1950年、アメリカがフィリッピンの支配者として立ち戻った局面で、四代にわたる支配者の変遷を目撃してきた60歳の老人の言葉として、次のように書き留めている。「スペイン人はよくなかった。アメリカ人は悪かった。日本人は一層悪かった。しかし最低なのは二度目に来たアメリカ人だ。」(『レイテ戦記』上掲書、301頁)。そして大岡は、現地で【兵士】として戦ったものとしての反省をこめて言う、「日本兵は危機に於ける自衛という動物的反応によって、【在比の】中国人やフィリッピン人の幸福追求の権利を奪いつつあると意識することはなかった」、「侵略の実行者の意識しなかったものも、戦場となったフィリッピン人にとっては、被害という事実となっていた」(321-323頁)、と。
- 34) 小林は、この伝聞とともに、「公報」・「死亡認定理由書」を掲載している。その際に、「竹内の所属系列の長は、塚田中將をはじめほぼ全員が生還している」と書いている(小林『恋人の眼』、255-258頁)。先に注で紹介したバギオ戦線に従事した兵站病院薬剤官も、米を21俵確保しえたことや、ゲリラを「景気」よくやっつけた話を半ば楽しそうに回想している。「兵隊」の「死ぬるや あわれ」である。
- 35) 『筑波日記』1、新全集、1944年3月18日、22日、23日の記録参照(317-320頁)。なお竹内は知らなかったようだが、同じ宇治山田市(現伊勢市)出身の学徒兵に永田和生がいる。永田は、京都大学在学中に共産主義学生グループを指導したとして治安維持法で検挙されたために、卒業と同時に陸軍に入隊しても幹部候補生への道を閉ざされ、ビルマ戦線で一兵卒として死んだ。1916(大正5)年5月22日生まれだから、竹内よりも6歳上、同じ5月生まれであった。「僕は考える。世界戦争の激しい展開の中を、力強く貫徹していく法則を」と書き、竹内とは違った意味で、日本の敗北による「戦後」の到来を見通していた(『きけわだつみのこえ』光文社、1959年、150頁。『第二集 きけわだつみのこえ』岩波文庫、1988年版には未収。)
- 36) 桑島、上掲書、115頁。新全集、126頁。
- 37) 新全集、4月4日の記録は、『筑波日記』のなかでも最もながいものである。それだけ竹内の内省が重かったと言うことであろう。
- 38) 同上、4月14日の記録、342頁。用心していると云っても竹内のこと、弾薬庫に歩哨に立っていて、

- 横になって寝てしまった。見つければ少なくとも二年以上のチョウエキだ、といったことも書いている（新全集、6月16日の記録、379頁）。
- 39) 新全集、81頁。また竹内の恋人については、小林『恋人の眼や』、113頁以下。
- 40) 和田稔『わだつみのこえ消えることなく』角川文庫、1995年、91頁。
- 41) もちろんこのことは、けっして若い独身の「兵隊」に限るまい。世帯持ちの農民兵士ならば、「こいびとの眼」をうたうかわりに、「君の手紙は字もまずいし、字の数も知らんと見えてずいぶんうそ字や仮名だが、君からの手紙はやはりいちばん待ち遠しい」と語り、「ふるさとの風」の繊細さよりも、「家の方でも今は穂もそろそろコゴミ、雀も飛び回って居ることと思います。支那の此の辺は水稲も陸稲もありません。畑のみで高粱が稔り始め、玉蜀黍は熟したのと未だ熟さないのとありますが、此もたいした面積です。」という中国大陆の驚きを伝えるだろう。そしてときには、その人間的な心情が、「世に出て始めて人生の生きて行く要領」を知り、「軍隊は運と要領」と観ずる忠良な「兵隊」根性と一体化し、抜刀なんかして農民を恐ろしがらせる侵略軍兵士を形づくっていく（岩手県農村文化懇談会編『戦没農民兵士の手紙』岩波新書、1961年、66、78、99頁）。
- 42) 竹内と同年の青年は、45年5月、東京で戦死する旬日前に、次のように書いていた。「美しくも清き富士、郷土愛、民族愛が祖国愛たることならば、人後に落ちない。だが、ただ過去の歴史、国体のために戦うのはどうしても割り切れぬ。人間の悲惨事は天皇では救えぬ」、「皇統、国体のゆえに、神勅あるがゆえに現実を無視し、人間性を蹂躪し、社会の趨くべき開展を阻止せんとした軍部、固陋なる愛国主義者。彼らが<sup>おもむき</sup>大御稜威をさまたげ日本を左右して来たのが最近の有様。宮様と平民、自分はもうかかる封建的な、人間性を無視したことを抹殺したい」、「理想と現実とのギャップ。苦しみつつ若き生命を散らして行く人々。自分とて後半歳の生命。どうしたって救いはない。」（『新版きけわだつみのこえ』岩波文庫、1988年、423-425頁）
- 43) 沖縄戦での日本軍の反撃を有利にするために、もっぱらアメリカ機の攻撃を吸引するための「海上特攻」の任務を与えられた戦艦大和で、その作戦に疑問をもつ意見に対して、一人の下士官は次のように言った。「敗レテ目覚メル、ソレ以外ニドウシテ日本ガ救ワレルカ」。「俺タチハソノ先導ニナルノダ ニホンノ新生ニサキガケテ散ル マサニ本望デハナイカ」（吉田満『鎮魂戦艦大和』講談社文庫下巻、45-47頁。また上巻、32頁）。なお吉田の仕事に対する評価については、拙稿「『鎮魂戦艦大和』と戦争体験」光和堂、1982年を参照されたい。
- 44) 「帝国海軍における私たち予備士官の地位について、私は今宣言する！ 帝国海軍のためには少なくとも戦争しない。私が生きそして死ぬとすれば、それは祖国のためであり更に極言するならば私自身のプライドのためである」と、「我が十三期の学徒出身の搭乗員がいかに弾圧されているか。今戦争しているのは誰だ！ 私の戦友であった同期の艦爆〔艦載爆撃機〕乗りの半数はすでに死んでいる」（林憲正の手記、『新版きけわだつみのこえ』上掲書、301頁）。
- 45) 「涙拭いて逆襲し来る敵兵は髪長き広西学生軍なりきノ壕の中に座せしめて撃ちし朱占匪は哀願もせず眼をあきしまま」（渡辺直己の項、『きけわだつみのこえ』第二集、光文社、1963年、95頁）。
- 46) 1944年5月、戦局も押し迫ってきた時点で、インパール作戦に動員された中年の兵士は書いている「死そのものはあまり考えていない、無益な死、割りの悪い死が納得できないのだ。……俺は天皇陛下のため、帝国のために死ぬ気はない。妻子、肉親、それにつながる国民の幸福を守るために、戦い、死ぬんだと自分に言い聞かせ、納得したような気になっても、やはりそれは偽りだ。すぐまた妻子を案じ、身の不運があきらめきれない。」（荒木進『ビルマ敗戦行記』岩波新書、1982年、51-52頁）著者は自覚していないが、竹山道雄『ビルマの豎事』に出てくるように、戦場から生き残り、収容所では合唱や器楽を著者が楽しむことができたのは、著者の属した「烈（第31）師団は、インパール作戦の完遂を拒否した佐藤幸徳師団長の麾下にあったという僥倖に恵まれたからであった（NHK取材班『責任なき戦場インパール』角川文庫、1995年、183-184、218-225頁）。
- 47) 「ああ、我々はどこへ、何のために戦うのか、その目的すら失われなければならない。」「サイパンの玉砕を聞いたとき、俺の小さな胸は冷酷な事実の前に、激しく痛んだ。どのようなことになっても、



- 俺はサイパンの悲劇から君たちを救わなければならない。」(宅島徳光の項、同上、329頁)。
- 48) 桑島，上掲書，218頁。竹内が従兄弟の大岩保を「兄さん」と呼んでいるのは、大岩の父が亡くなったのち、一人息子の保は竹内の母にしばらく預けられて、竹内と一緒に育ったからである。保の母は、竹内の母の姉であった。「善意の塊」のような竹内の母芳子など、家族のことについては小林繁『恋人の眼や』，第一章を参照。
- 49) 竹内は、44年7月、サイパンの玉砕後に東条内閣が倒れた時に、東条が好きでなく、「山師」のような気がしていた、と兵営内で書き留めている(『筑波日記』2，新全集，393頁)。
- 50) 新全集，626頁。「暴支膺懲」を新聞がキャンペーンし、陸軍が兵を動かすと、従軍を嘆願する血書が続々と集まってきていた時のことだった、と同人の一人坂本楠彦はこの頃を回想している(682頁)。
- 51) 新全集，657-658頁。替え歌は竹内の得意なものの一つで、空挺隊の訓練を筑波で受けている時、演芸会で「空の神兵」の替え歌を披露した。しかし、その内容が「神兵」を侮辱しているとして、以後はそれを歌うことも、また新しい替え歌を作ることも禁止された(新全集，44年1月21日の記録)。残念ながらその替え歌がどういうものであったかは、分らない。
- 52) 新全集，69～76頁。草稿は、竹内の蔵書にあったある詩集の目次にかかれていた。
- 53) 新全集，351頁。
- 54) 桑島，上掲書，136頁。
- 55) 新全集，『筑波日記』1，44年3月27日の記事，322頁。もっとも2月22日の日記には、「アメリカガボクノ日本ヲ犯シニキテイル」とあり、4月4日には、「印度流血史」という新聞記事でイギリス人がインド人に加えてきたひどい仕打ちを読み、日本が負けたら、かつてイギリス人がインド人にしたようなことを、アメリカ人が日本人にする、日本の男は全部殺されるので、どうしても勝たなければならない、と書いている(333頁)。折りしもチャンドラーボースを首相としたインド臨時政府の要請もあって、44年3月から、インド・ビルマ方面には日本軍のインパール作戦が発動されており、新聞はイギリスの悪政を言いたてる宣伝を盛んに載せた。義憤に駆られた竹内の戦争の見方も、その影響を受けていた。
- 56) 第二次世界大戦中、アメリカに対する忠誠心を疑われた日系人たちは、「祖国」と「敵国」の間に引き裂かれて、苛酷な運命に立ち向かわざるを得なかった。竹内の中学校の同級生で東京での学生時代にも親交のあった中西芳平もそうであった。中西は、アメリカ生まれの日系二世で、日本の教育を受けるために、志摩の祖父に預けられて育った。両親と共にアメリカに残った兄は、アメリカ軍に入った(小林『恋人の眼や』，180頁)。こうした日系二世の問題については、戦艦大和に乗り組んでいて戦死した二世の個人史を取りあげた吉田満「祖国と敵国の間」(『鎮魂戦艦大和』講談社文庫上巻所収)を参照。
- 57) 渡辺清『砕かれた神』朝日選書，1983年，262-268頁。
- 58) 新全集，105-106頁。
- 59) 中学時代に「故郷」と題した作文で、宇治山田市の自慢といえはまず第一に「大神宮」だが、「馴れてしまって、あまりありがたいと思わなくなったような感もないことはない」と書いている。姉の結婚相手の松島博が、東京帝大の国史科を出てから伊勢神宮庁に勤めていた。竹内が、中学3年時の頃の走り書きに、「人間—中学」として、以下を二つのコースに分けた図がある。一つは、「高校—帝大—サラリーマン—The End」のコース、もう一つは「ブラブラ—マンガ家—The End」のコースである(小林『恋人の眼や』，31-32頁)。竹内は、後のコースに優位を与えていたから、義兄の勤務する伊勢神宮の地位を無意識的に小さく思いなすようにしていたのかも知れない。
- 60) この箇所を読むとき、私はピアスの短編小説の一つ「アウル・クリーク鉄橋での出来事」を思い起こす。南北戦争の時、北軍に捕えられて絞首刑になるベイトン・ファーカーは、死の瞬間に、死を免れた自分についての長い物語を思い描く(西川正身訳『いのちの半ばに』，大津栄一訳『ピアス短篇集』いずれも岩波文庫に収載)。
- 61) 新全集，『筑波日記』2，4月14日の記事，341頁。

- 62) 後に大岡昇平は、『野火』に見るように、フィリッピン戦線において三八式銃が日本軍兵士にもって  
いた意味を克明に追及することになるはずである。この天皇によって下賜されたという擬制をとる旧  
式の武器は、アメリカ軍の強大で大量な重火器の前ではまったく無力であった。それだけではなくそ  
れは、食料調達の威嚇の武器として用い、結果的に現地住民を殺傷することで、人民的な憎悪を増幅  
する条件となった。そしてついには「猿」を撃ち殺して飢餓を免れるべく、友軍から人肉を狩る絶望  
的な共食いの手段に堕して行く。
- 63) 桑島，上掲書，32頁。
- 64) 新全集，「死ぬこと」，455-456頁。
- 65) 新全集，「愚の旗」，93-96頁。
- 66) 『原民喜全集』第 3 巻，芳賀書店，1969 年には，「杞憂句抄」が入っている。
- 67) この時点になると，日本の文学者たちの圧倒的な部分は，「聖戦」を讃え，海に野に空に「撃ちてし  
止まん」，水漬き，草むす屍，散華する「戦死」を兵士たちに求めて止まない異常な精神状態に陥って  
いた。保田與重郎などの「日本浪漫派」にかぎらず，斎藤茂吉，高村光太郎はもちろん，太平洋戦争  
末期に死去する北原白秋，島崎藤村をひっくるめて，そしてまた竹内と同じく，伊勢の地に詩碑を持  
つ北園克衛をもふくめて，日本を代表する歌人・詩人・小説家たちは，十五年戦争の末期に，大挙し  
ておどろおどろしい戦争賛歌・戦死賛美のくさぐさを天皇とその侵略戦争に捧げることを競った。そ  
の文学精神の無残な壊れ・崩壊についての批判的な考察と，戦争責任の究明は，今なお未完である。  
(たとえば文壇一般については，尾崎秀樹『近代文学の傷痕：岩波同時代ライブラリー，1991 年を参照。  
また詩壇については，桑島『純白の花』が詳しい。)
- 68) ここはそれを論じるに適当な場ではないが，鶴見俊輔は，世界的な覇権国家アメリカとそれに同盟  
する「戦後」日本を映し出す鏡として，21 世紀的な新しい「転向論」の基軸が必要であるという。そ  
の軸を「まともな人間として現代に生きてゆこうという考え」(鶴見俊輔・鈴木正・いいだもも『転向  
再論』平凡社，2001 年，30頁)に置き，戦争に対する不同意・批判・抵抗に戦前戦後を一貫する「転  
向論」を再構築しようとする鶴見の構想は，竹内の「戦死」に対する詩想の評価にとっても，有効で  
ある。イタリアでもコミンテルンとの関係を軸にしてグラムシ思想を評価しようとする古い方法によっ  
てではなく，クローチェ主義とグラムシの批判的マルクス主義との理論的な分界を丁寧に検討し，ファ  
シズム・ナチズムの戦争観やアメリカ的な自由主義の覇権主義への傾斜を批判し，反戦・反植民地主  
義の視点から，民主主義・人民主義の理論的深化と解明に取り組んだ仕事が出ている (D. Losurdo,  
Antonio Gramsci dal liberalismo al 《comunismo critico》，Gamberetti Editrice, 1997)。
- 69) 野田又夫 (『中島栄次郎著作選』刊行会)『中島栄次郎著作選』(澤森美佐子・鈴木真理子私家版)，  
1993 年，302頁。中島は，京都帝国大学の哲学科で田辺元のもとで学んだ。大学在学中から，大阪高等  
学校時代の同級生保田與重郎が主唱した同人誌『コギト』，ついで『浪漫派』にも加わった。竹内より  
は 11 歳上で享年 36 歳。
- 70) 日本浪漫派の役割と位置を概観するためには，佐藤静夫『昭和文学の光と影』大月書店，第二章を  
参照。